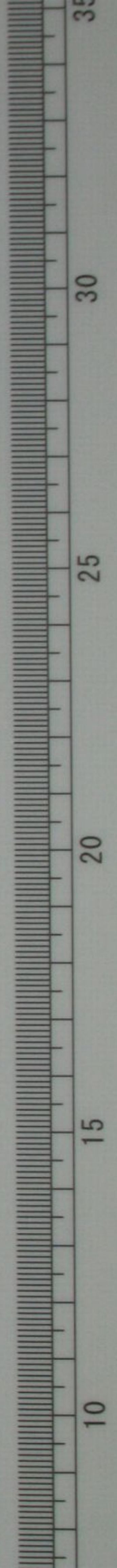


昭和十三年十月廿九日起業

成實度右承

天

特別  
14  
1919  
497



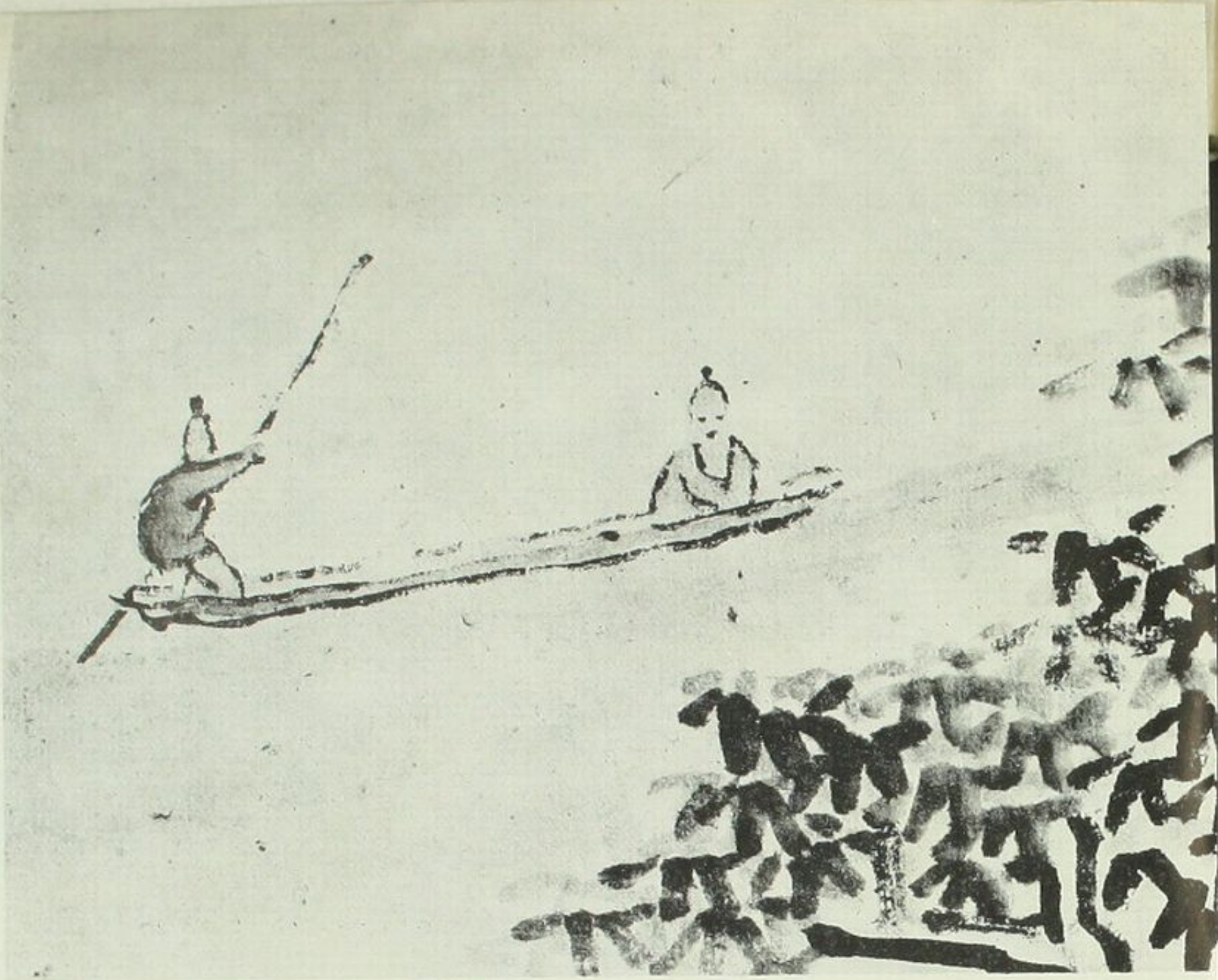






十  
三  
日  
大  
雅  
の  
筆  
一  
冊  
〇

176762



池大雅筆 秋溪釣舟圖部分（口繪第一面参照）

こころは有  
めら一寸のま  
も

奉賀  
大雅先生知命之壽  
大雅先生、河を渡り、七十二歳 惠達信  
信舟の舟その、高兼葭堂乳龔  
又も出て、米洲義方  
青年の祇を、千代  
唯存光

大雅堂信

大雅先生、河を渡り、  
信舟の舟その、  
又も出て、  
青年の祇を、  
唯存光



の時迄おとちのれよあはれあり、是れが戦後日新あり侍る  
 るより、交を得れと云ふ得より、自合の熱心の家あり  
 のれがまじし目跡あり。此の古画の共ニ花目かきとあり  
 熟しとあり。後ゆと大雅の北氏年齡、此名あり  
 かあり、大雅の流ゆらと廿二歳若かつれとあり、先  
 かう父子の如きとあり、（一）二女の園をぬれおと  
 又曰く、ゆらと人長井張心所義の山あり、橋の園也  
 あり、ぬれとあり、此名あり、熟心の人れが未れ其名を  
 見よ。鋤茶屋のむと、（二）此の作と評せんとあり  
 御里茶の流ゆらあり、（三）大雅の柳を茶  
 と姓兼、（四）柳を教と云ふ、  
 初め  
 切つれ。

大雅

大雅 柳 城 野

北勤筆

大雅 柳 城 野 (色柳城消) 書篆雅大 圖四第

大雅の無名の名、  
 あり、（一）此無名の  
 私淑して、（二）此の名を  
 採つ、（三）此の名を  
 成とあり、（四）此の名を  
 畫を、（五）此の名を  
 かくとあり、（六）此の名を  
 音く、（七）此の名を  
 也、（八）此の名を  
 北齊の、（九）此の名を  
 勤敬



第五圖 大雅筆 嵐俊明臨寫別圖 新島市 奈邊茶屋藏



とあり  
かゝ取  
つんか  
あゝ  
うら



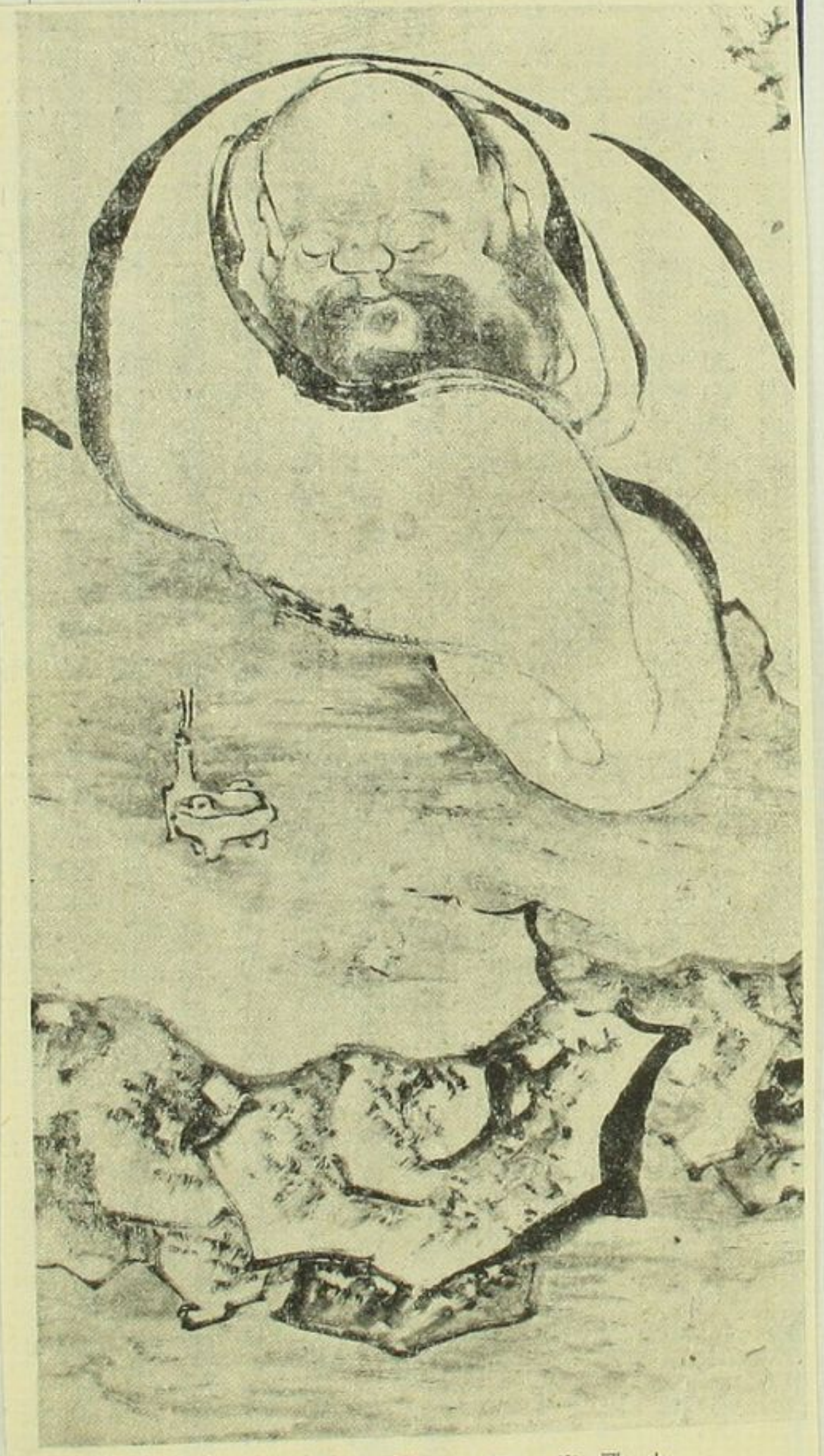
第六圖  
春城車馬圖  
東京長井越氏作

雨霽衝楊翠喚河。翠中飛閣自嵯峨。曉清窓卷重山雪。日靜尊傾萬里波。倚檻客如天上鳳。吹簫人若月中娥。蓬萊花月長相留。無限春風此夕何。郡山柳里恭題。

大雅の掌痕懐こまゝの所をもあつともよみ自分いま  
い宿りしうゝあふ元年大雅五十一歳の才を思ふれば  
社園の相馬屋を祝安か信をえはぬ大雅か記念する  
形を捨るといふはんか九一方の午の卯の春と名  
し此のまままを思ふか智洞を流るれともいふ  
字影の此等うま依裏に照りぬめてある。



大雅をり  
風貌ハ中  
林外洞と  
酷似してあ  
りて大雅の  
知る人が作  
洞をえし見  
連つたところ



大雅筆高士圖 逸羽居

ことし自分か相見香印の記か始りてわづ所のあま  
難き年虎十代の揚山楚賦のいれ中林外洞傳  
のゆゑ或る時林外洞か難草く来て乃以時凡偶階  
リハ海福院の一葉かあるか来て林外洞をえり



大雅が来てゐるのかと怪みビックリしたといふ話がある。陽山は夙に尊王の志を抱いて、近衛家や山内容堂なども通ずるところあつて、國事に参劃したが爲めに、生前特賜の禪師號を受けたほどの傑僧であつたが、一面には風流韻事を楽しんで、魯堂また蕉空と號し、歌道を小澤蘆菴に、書を龍澤に、畫を竹洞に學んで、いづれも相當の伎倆を示した風雅人でもあつた。此の和尚と竹洞とに就いては、録すべき材料あれば、いつか稿を改めて一篇を草する考へがある。和尚の遺稿として、隨筆、歌稿、句集、畫稿等の相當に傳つてゐるものがある。その内に、中林竹洞小傳と題する短文の原稿が三通もある。大同小異であるが、その内前述の大雅再來と思はれた奇譚の部分を抄録すれば、

竹洞山人者(中略)平居定交者縑素僅五七人耳、余(陽山)以三方外好畫、就于山人一請學之、山人曰、公則問畫、我則問禪、不亦可乎、是以相知者三十餘年于茲矣、先是山人訪余無礙室於西園、時會隣院一葉師來過、師見客怪問曰、是何人也、往年池

大雅每來與先師斯經一晤話、吾親侍左右、今審客之容貌言語、實彷彿乎故大雅也、余語之山人、山人笑曰、霞樵沒而期年是我生之初、則果其再生乎、余熟惟、至乎山人善畫彈琴賦詩及詠倭歌之類、儼有大雅遺風、夫李家兒於羊祜、五祖介於子瞻、是皆再生有證焉、獨於山人奚復疑之、(下略)とある。一葉といふは海福院の陽門和尚の軒號である。陽門は斯經の高弟で、その若い時斯經に親侍してゐた頃に、大雅が毎度斯經のところへ來たものだから、陽門は大雅の風貌をよく知つてゐたわけである。その陽門が竹洞を一見、大雅が來てゐるのかと打驚いたといふほどであれば、竹洞の容姿は餘程よく大雅に似た人であつたと見える。而してまた竹洞は大雅の歿した安永五年に生れたのであれば「果其再生乎」と手を打つて喜んだのであらう。恰も岡田爲恭が田中訥言の歿した文政六年に生れて、訥言再來を以て自任してゐたのと同様な話である。



春來南拆甲と云ふ春畫ハ支那風の田舎の中  
花散開と云ふハ花散開の意ハ大雅の意ハ  
いふと云ふハ、昔の事ハ異なり終りといふハ、  
誰の書しともいふと云ふハ、月宮雪嶺の画ハサ  
若者七人のハ、本林悦三の考証ハ左り也

これは蘆汀紀聞に「右春鬪拆甲、風月一齋(註。莊右衛門)弟子柏田阿波守著述、畫月岡雪嶺、兼霞堂自筆之跋文あり」と見えてゐるのに據つて否定せらるべきであらう。同書の挿繪は大雅堂ではなくて、雪嶺だつたのである。事實またその畫風はいかにも雪嶺で、大雅堂らしい面影はいづこにも認められぬ。著者柏田阿

波守はあまり聞えない人であるが、正しくは檜田安房守であり、名は直猷といつた。天明二年に五十二歳で歿してゐる。この人に就いては、私も未だ知るところに乏しいが、橋本經亮著橋窓自語卷二の彫刻師長常のことを記した條中にその名が見えて居り、右の長常や圓山應舉と善

かつたことが知られる。なほ清田僧叟の孔雀樓筆記卷三に「予弱冠の頃、王元美の四部稿を見たく思ふ。書林を募て、重價を出し借んといふ。それさへならず。檜田房州この時いまだ江南にあり。一面識ならねども、試にこれを借る。即ち許容あり。漢魏叢書をも借る」云々と記されてゐる。これらを通して、その文雅の人であり、且つ好學の士であつたことが想像せられて來る。春鬪拆甲はこの人の戯作するところだ、決して大雅堂ではなかつたのである。後の書肆の廣告に、大雅堂の著書と明記してゐるのは、書肆の售らんがための奸策であつた。



大雅の妻性いろいろと云い入れ池母名ともふ名は池邊  
の妻と記し名は無いか未だるをの妾役とあるは。其の  
高家の子は家佛を菱屋と云ふて父は嘉左衛門と  
稱し大雅は侍實業とも云ふれ高家を指すのい  
あらう。大雅の四歳の時父は別れて母と同居し此とあ  
らう。今日確定家の此世に抱き、四歳に父と死別  
し此のうら、嘉左衛門の家庭は何か職の後かあ  
つて、妻は別居し、是か今父と同居し此の母  
ハ市井と云ふも他人と語ること難しき事柄か  
あつたを志而四歳に死別と傳くはと云ふ説あり。  
また他人より後り得るものありしことありて、  
大雅は、大雅之堂とも云ふれ俗に稱し池邊秋葉と



云い母との長時代菱屋の高雅を名乗つたこと  
七あつて、何れ秋葉の切時なり高家不似今の養  
所の夫が、人をも認めんと、二十一年位も養を以り  
て母を養はつた云ふ人も、兄弟父と離れて父の消息が  
知んないの、養父と云ふ噂も、此のうらある。

家譜の「四歳、父嘉左衛門死去」といふこと、細合麗王が「贈池

戴成憂居」詩中の「少年先嚴侍」の句とを照り合すと、四歳の時、いか  
にも父の死去に會つた事を事實とせねばならぬ如うだが、私は猶ほ正面  
から之を首肯する事を躊躇する。其は前回の言をくどく繰り返す如うだ  
が、名耕、字子職の改名の意を以てすれば、十五歳の時、父に疎んじら  
れて、母と二人で別居したと解する。而して四歳の時と、十五歳の時と、  
二回父が家庭問題を起して居ると見るのであるが、其の四歳以後の父が  
日常は、孝子大雅にとつては人に語ることを欲しない事情なので、表面  
は四歳父に死別と云ひ傳へて來たのであらう。或は母のみは其の行動を  
知つて居たであらうが、平生大雅には告げなかつたであらう。

父と生別以來、もう十數年！ 弱い腕一本とは云へ、よく一家を支へ  
て、自己の學道をも進め來つた大雅！ 父も無事に家に在るものならば、  
如何に喜んでくれるであらう……。 何うかして父母の慈顔を並び拜する  
團樂の日の再び還り來よかしと、日々を密かに神佛に祈つた甲斐もなく  
年月は空しく流れ去つて遂に今絶望の最後の日が來てしまつた。  
死別といふ大悲痛事に襲はれ、百計も術がない。せめても慈父の恩を  
忘れじと、さてこそ菱屋嘉左衛門の名をうけついたのである。  
以上の理由によつて、過古簿にも母は逝去の年月日が記されながら、  
父は明記を憚つたのかと見られる。

(人見少平 池不雅存傳)



大雅の書なるはドニアと云ふ所のものなり。其の二品あり。一は石印の書なり。二は龍刀の書なり。三は巨大なる石印の書なり。四は潤筆の書なり。五は書畫の書なり。六は書の書なり。七は書の書なり。八は書の書なり。九は書の書なり。十は書の書なり。

大雅の葛原艸堂の床の間の一隅に、青龍刀の一振が樹てかけられてあつた。

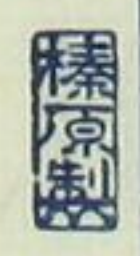
それは隠元禪師將來の二刀の一つと申傳へるものである。多分は黄檗から貰つて來たのであらう。或は彼の五百羅漢の襖繪をかけた時のお禮にでも貰つたのではあるまいか。物ずきに所望したのであらうと想はれる。次に方一尺、高さ二尺計りといふものすこいばかりに巨大なる密臘石印があつた。鳳凰鈕で、明刻のものであつたといふ。これも黄檗あたりから持つて來たものであらう。夫等が大雅堂什物の二大奇であつた。大雅歿して後、餘夙夜が後の大雅堂を守つてゐた頃、その二品と、他の文房具等合せて計

(7)

十點が典物として堂を去らねばならぬこととなつた。後ち大阪に移り、更に伊勢へ往つて四日市の某氏に秘藏されてゐると、明治四十二年大雅堂定亮翁から聞いた所である。其後どうなつたものか。聞かまほし。

相見香函

私の日記の表に「相見香函」の語あり。此の語は、大雅の書に「相見香函」とあり。此の語は、大雅の書に「相見香函」とあり。此の語は、大雅の書に「相見香函」とあり。



○予之作又長屋海田の書と云ふは家藏の十枚の書なり。其の書は、大雅の書に「相見香函」とあり。此の語は、大雅の書に「相見香函」とあり。此の語は、大雅の書に「相見香函」とあり。

海田翁見ゆ時五言余愛之不能措遂  
乘輿插其詩句於石得且方初欲配画  
者批然不得可也之石遂暫配松最良日  
樂耳

大正癸卯夏

有商翁人口

海田の石と重名と云ふ、重の字を割き千里と云ふ



此容也の心姓也、花のりを私淑し相高の年既  
あり、此帳の詩を花のりは似て、款を掩く心気  
人と兼し難し、在友中河田の仙基名古所方に在り、押  
真毛ハ多く冬次の心也、家花ハ河田の画多クあるを  
詩とて収めたる也、此帳也、余のま女人の跡と云々  
所以

十月十八日記

帳下の一泊ニ云々

白河関外雪千堆、以衝寒跨马来、  
春翁此處落花根、  
鶴海仙基



此の杯は、昔の  
 名匠の作とあり、  
 其の形は、  
 別なものである。  
 昔の遺品、大に  
 不味く、皆此の  
 別印あり。

余嘗て此の印  
 あり、則ち其の  
 可なり。

此の杯は、和  
 田義盛の杯と  
 傳ふ。其の形  
 は、昔の杯と  
 異なる。



此の杯は、昔の  
 名匠の作とあり、  
 其の形は、  
 別なものである。  
 昔の遺品、大に  
 不味く、皆此の  
 別印あり。

平重衡遺品。鎌倉報恩寺の什物に、皿に  
 似て浅く、内外黒漆、金泥で内へ梅花を描  
 いた盃がある。之は重衡が捕れて鎌倉に在  
 る時、白拍子千壽前が彼れに酒を侷めた時  
 のもので、勿論白拍子持參の盃だ。その頃  
 の宴制として、白拍子は盃を持參する。そ  
 の盃に朱色許されず、必ず黒漆なるが法ら  
 しい。

和田義盛遺品。曾てある侯伯の家に、形  
 平にして内極めて浅く、容量一升、黒漆金  
 描月下の海邊に玉兔奔る意匠の古盃があ  
 る。傳に據れば和田義盛の遺物なりと。其  
 れがいま鶴ヶ岡八幡宮に現存する。更に傳  
 へて、大磯の虎御前を中心に、曾我の殿原  
 と和田一族酒戦の名残りなりとも云ふ。其  
 れ或は然らん。第一黒漆盃なることにより  
 白拍子虎御前の盃なる事が首肯しうる。之  
 から考へても、之は義盛遺品といふより  
 も、虎御前遺品のほうが正しい。







とわがうのちよひ北外に新指の和国杯のちよひ他によまて  
眼に記候まぢよひのちよひ杯に列候ておく

目今が秋山陽の遠きうを思ふまじ没頭してわれ往年山陽  
とわがうのちよひ酒具を得たはと東都入浴んれ杯合ふ  
おちてこれ杯と三浦井元の海列桐に山陽の書のある  
一杯を思ふやと公指動いた公遊入平入入つことか出  
来まうらうれおちてを平に山陽を思ふの毒風即  
の録のある雲を思てまんと得んと試みれかえり杯  
をのち思れものも山陽の杯も思ふ及後戻つ  
てまれ杯を思ふまじよひのちよひのちよひ思ふまじ  
杯も思ふまじよひのちよひ思ふまじよひのちよひ思ふ  
まじよひのちよひ思ふまじよひのちよひ思ふまじよひ  
まじよひのちよひ思ふまじよひのちよひ思ふまじよひ

と命をまじ思ふ杯を思ふまじよひのちよひ思ふまじよひ  
まじよひのちよひ思ふまじよひのちよひ思ふまじよひ  
陽に思へれ杯を思ふまじよひのちよひ思ふまじよひ  
杯の湯液がある山陽の杯を思ふまじよひのちよひ思ふ  
まじよひのちよひ思ふまじよひのちよひ思ふまじよひ  
まじよひのちよひ思ふまじよひのちよひ思ふまじよひ  
まじよひのちよひ思ふまじよひのちよひ思ふまじよひ

以上杯に終りてなる思記を思ふまじよひのちよひ思ふ  
まじよひのちよひ思ふまじよひのちよひ思ふまじよひ  
杯に思ふまじよひのちよひ思ふまじよひのちよひ思ふ  
まじよひのちよひ思ふまじよひのちよひ思ふまじよひ  
杯に思ふまじよひのちよひ思ふまじよひのちよひ思ふ  
まじよひのちよひ思ふまじよひのちよひ思ふまじよひ  
杯に思ふまじよひのちよひ思ふまじよひのちよひ思ふ  
まじよひのちよひ思ふまじよひのちよひ思ふまじよひ















殊と賑つた時の度、東に鏡二日月にてもあり、故疾を堪へるに  
好適の日であつた。自然経遠仙が居ると此處に今更一時的の  
事としか残念とせられた。疾の終の共和政体説といふ石田  
志也あんなるの語も出た。大隈地下の要の支那攻め  
の経緯を徹美とて居るであらうと誰かの胸臆も去  
来した。今最の誰かの言ふに、樞の疾を傷けた未島  
恒長の及び松り七五十年、あると云ふ此後、樞の疾  
の修約の止の危機一髪の漸末の事、七治柄と云ふれ、  
自分のおのりつたといふ開の論は、其年表の形式論法  
師の疾の逸事を説くも、自分も氣さういふ、何と居る  
かと、新説とて、三十分の、且つ溝渠のこと、く自  
今の地帯、一、大隈、一言、一、二、ある、逸、決と、久、佳、  
自



い、  
置、  
後、  
じ、  
か、  
考、  
代、  
亦、  
を、  
口、  
さ、  
な、







○今夏上野不忍池の寺を会場と、大賀一軒世川院  
等處を親蓮人々と催し、毎分ある由來の一時刻  
曉天より故より一回も銘を刻、實に不忍池の一日  
○事、喜望亭時代より、物處の北雅合を催す、  
江白の蓮、曉天より、實を公らふよし、葉  
を飲み和して炊くもよし、夏時の一日、海をを  
偶々蓮底を捨てるも、大沢枕山を中心と、丑七の詩  
客親蓮唱和の詩を得、関雪江も今案の中、在  
つと稿、江の録す所也、上野の戦争、後初め、  
きり折の合、合たり、詩、就と刻と、今左、枕  
山の詩二三を摘録す、

去年詠此癩親蓮、今歳四外不設例、這杯

楚語香素句、熟一冊、物更、要李、回侍

妓唱宵、水際、香粉、香消、破、菱、荷、散、香、今、朝  
詩、客、禱、清、句、祠、女、洞、龍、石、出、聽

梅、園、香、羅、宴、昔、時、難、情、景、物、晴、中、移、三、分  
紅、繩、七、分、水、減、却、鴛、鴦、添、路、鶴

新、波、南、畔、倚、欄、干、柳、柳、荷、花、水、渺、漫、隔、著  
困、難、殊、有、趣、外、湖、看、勝、裏、湖、看

○早天の身、人大隈、先侯の生誕百年、と記念する、今、  
年、開、く、へ、き、と、時、向、の、為、り、本、年、に、延、び、し、  
以、が、偶、然、と、し、つ、つ、時、候、を、得、り、親、鳥、り、  
食、を、と、り、と、前、より、早、く、唐、東、海、流、し、漢、口、  
大、加、房、の、祭、を、召、し、ひ、る、最、中、に、攻、取、り、



し度報の影を逐しつゝある時心あつた。此の意義ある今より昔  
相文相米と大使黄泉の院議令帝大其意大なる長かそ  
九く演壇に起ち候。代表として永井通相七一坊の演説と  
祇女最後大隈現候各の挨拶を今と別れたかとの演説  
も時局に洽及し、時艱を對し候と徳の熱心ハ偉大  
深んて、湯堂に祀奉の誠演と共々、早大の特色、人間大  
限重介とよ侍化を編むと夏演に候つたが、自今早  
稲大の勢力を左の進徳文と掲げ、今日の式演進行  
大に貴衆の院議長共々、手校反ひあること外未  
演客の注意を惹いた。



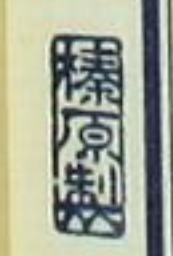
○十数年夢りて予と解ぬ二階元後家の高き押  
八と初めと解きえん一杯と持る湯ちとあき、  
皆と遺忘のよまはく、取り出と捨てる大瓶丸  
のせきこのち

一 菱湖指書大上感応経版木全部  
此よの家家の懸花

一 和泉家遺荷一ツ指  
大抵書前数

一 石油今比記念花瓶一双  
大形物志瓶 大坂の放送局

一 布袋豆物 西暦の屋お危やき



一 小雑刀一振 鞘つき

刻銘 左 節 右 節 正 徳 宗  
慶長 元 八月 吉日  
龍平 右 脇 田 義 神 故 御 馬  
節 右 脇 田 義 神 故 御 馬  
節 右 脇 田 義 神 故 御 馬

一 樂為侯 樂其樂園 書板歌  
余の故を別在 招けしもの也

一 聖教序 一面碑 一幅

一 中井杜微 激湍風竹 大幅

一 大野無懐 出谷山 大幅  
大空 七 年 日 野 人 三 沙 門 人 市 乃 乃 乃  
平 乃 乃 乃

一 浅草 赤城 安川 流風 景 大 横 披  
此の図と同一と云ふ者 互 尊 文 庫



：揚子舟、こん其の副本也未漢其、去  
成上人より早く致す

一石川侃方書者聖域大幡

一後園二字額

一土生卯美終二字額 美疑ハ生秀の  
字アリ

一徳河也三宇額米唐書

一山外也今所二字額 左心の語を採る云  
款アリ

一唐人書刻聯二枚

一丈形字三 合利入

一坂口五峯存稿一束

一涼三平二枚

一獸皮一枚

一原稿 未尙 十枚函

一雜題 集外 一ツ書

一 五外 額并大隈家以身云政ノ箱共二

一 家化一箱 此内同出受印記紙送卷

此類等あり傳ふを要す

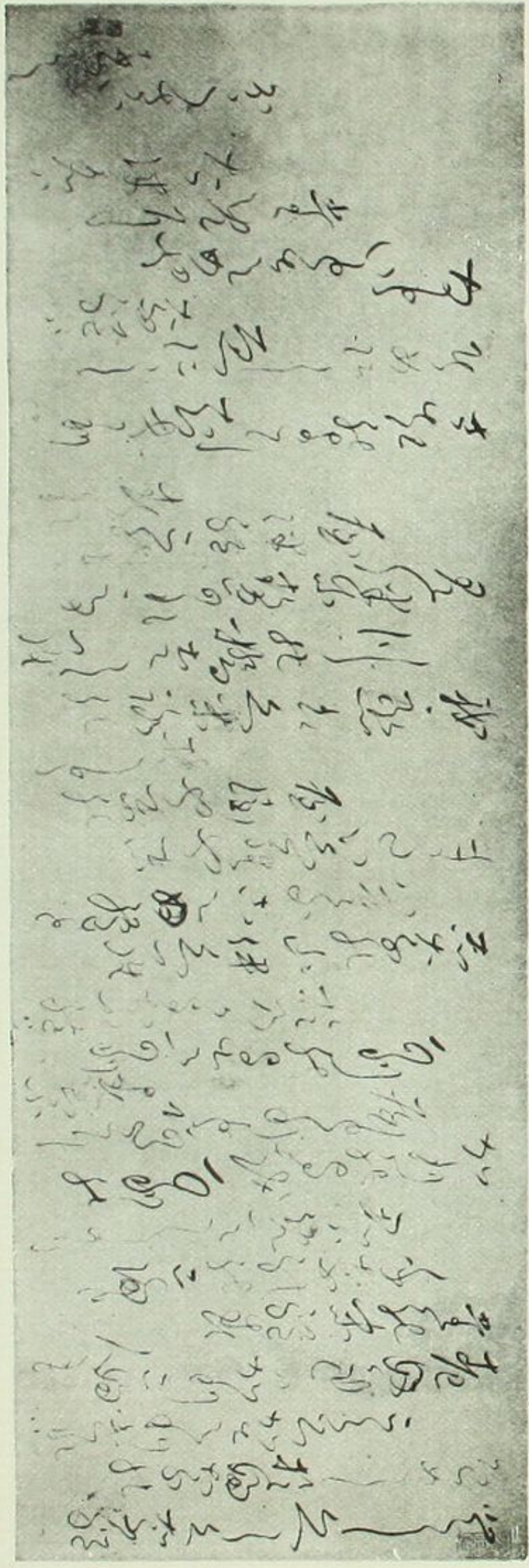
以上より無用の長物なをも、清くも尋ね難きもの  
あり、唯此系稿と未尙ハ故り多きを過き保不  
まき原稿若干のハ禁料とすくは、及故中維々  
名家の筆、成りまあり、尋ねて重宝と一冊と張こ  
み保存すること、此家筆行と題し、  
こん其の改ハ五峯、伊原香草、  
新州秋南、日影ハ  
濱村、関雪江と称す五峯存稿ハ全部保存



まま事とし書画に花む書簡の送りまく一々紙拾り  
 懶く、燃料とよむときよ大合利一個に満つ、向は妻業  
 大心きよのまけんも他日を待つと教正理と改す  
 〇村山秋浦に宛合を托し書画百枚於教點ハ三行  
 きりしと秋浦教す、此宛合品の内、余の書、揚の強  
 交小骨分一紙、味ふし、印人の手入、及んことを望  
 ぬ、秋浦物に心配し、結果板存原、三印（浮田  
 和民の女婿とす、市書家）相商の便を以て引元  
 ことと、いろろなるを以て手入、造ることを、海内道  
 道の書画十六物を誂礼として送ること、あるは、  
 道道の書画を、望むし、の、吹合、の、手、入、り、と  
 ハ、便を以て、手印、出来、有、る、故、に、く、ま、り、ま、し、

和歌

交を得る也、谷幡野余の起、運、家、に、有、残、る  
 道、道、茶、茶、五、六、行、ち、家、に、何、れ、し、  
 〇、彫、り、の、以、後、に、拾、り、我、誂、此、能、二、能、の、能、能、に、  
 す、能、能、ぬ、ま、し、其、の、字、と、ね、ち、り、ち、た、の、



鶴田鶴齋筆 和歌







閑時漫録

馬場孤蝶

一葉許婚の人

市島春城さんは「文藝春秋」の十月號に樋口一葉の許婚の人として、坂本三郎氏のことを書いて居られる。市島さんのお書きの通り、一葉の日記には、坂本氏の前名澁谷三郎としての行動が書いてあることは殆んど周知のことである。

澁谷三郎氏は、一葉の家へ養子になる筈になつてゐたのであるが、一葉の父則義氏が事業の失敗か何かで、身上が減つてしまつたり何かしたために、養子のことが沙汰止みになり、澁谷氏は坂本といふ富家へ婿入りをしたのだといふ風に、一葉の日記には書いてあつ

たと記憶する。

坂本三郎氏は、一葉の父母と同郷、即ち、甲斐の鹽山の近くの大藤村の生れであるので、樋口家とは古くから親しい間柄であつたらしく、一葉歿後、樋口家では、坂本氏との交際を續けてゐたのである。一葉の祭典、樋口邦子さんの娘さん（即ち一葉の姪）の結婚の席などで、坂本氏と同席したことがある。少し尊大に構へて居るやうに見えて、餘り感じのよくない人であつた。もつと、華々しく見える人であつたら、もう少し出世をしたのであらうと思はれる。

市島さんは、坂本氏は一葉の日記を読まずに死んだと書いて居られるのだが、これは甚だ不審である。坂



本氏自身が「俺は一葉の日記は讀まない」と市島さんに云つたと假定してみても、まだそれでも不審である。博文館版『一葉全集』の奥付によると、あの日記を含む前篇の第一版が出たのは明治四十五年五月十日となつて居るのであつて、樋口邦子さんは、その本を坂本氏へ贈つたのであらうと思はれるのだが、邦子さんは、

「坂本はあれを見て、ありやアひでえや、悪くすると、關係者たちから誹毀の告訴を起されるぜ、ありやアひでえ、ひでえと云つてゐましたよ」と、僕に話したことがある。勿論、全集發行直後のことであつたと記憶する。

坂本氏の「ひでい」と云つたのは、あの日記のなかでは、三宅龍子、川上眉山、平田、戸川、その他の人が随分酷烈な言葉で謂はば筆誅されて居るのを讀んでさう云つたのであらうと思ふ。

それから、同じ博文館版の『縮刷一葉全集』の發行は大正十一年六月十五日となつて居るのである。

その年の十一月下旬で、前記の甲州の大藤村の寺の後山に、一葉の記念碑が建つた。これは、杉浦重剛の

篆額で、選文は幸田露伴氏のものであつて、横濱市住の廣瀬某氏の特志によるものであつた。その時には、僕から頼んで行つて貰つた松崎天民、生方敏郎、畑耕一、松本泰、水木京太、高山辰三その他の人々の外に、樋口家から招いた戸川秋骨、半井桃水、關如來、高島平三郎、博文館からの横田路巴といふやうな諸氏が甲府市の談露館で泊り、甲府市と大藤村とで、講演をしたのであるが、大藤村での記念碑除幕式の時には、坂本氏も居合はせたのである。

大藤村での講演では、戸川君も僕も、一葉の日記には、戸川君も僕も一葉に戀愛の情を寄せて居つたといふ風に書いてあるのだが、それは一葉の勘違ひであつて、吾々の心持はさうではなく、一葉の人物に對する尊敬の念が、戀愛を起すには餘りに強過ぎた程のものであつたといふことを云つた。

一同甲府へ引あげて、又談露館で泊つたのであるが、その時、吾々のあとから大藤村を引上げて來た或人から、吾々が大藤村を引き上げたあとで、坂本氏は演説をして、そのなかで「俺が戸川、馬場兩人を裁判をするとすれば、二人の此所で云つたことは嘘であつて、

ま、つ、く









二人の感情は確に戀愛であつたのだといふ判決を下す。婦人に對する尊敬の念はやがて必らず戀愛にまで進展するものだからである」と云つたといふ報告があつた。これを聞くといふと、當の本人の戸川君や、僕などよりも、外の連中がひどく憤つた。或人などは、坂本が若し此の席へ現れざらば、皆で寄つて袋叩きにするに云つたからであつた。これは、早稻田大學に關係の事柄で坂本氏の人物、行動に不満を抱いて居る人が可なりあつたためではなからうかと今も思つて居る。

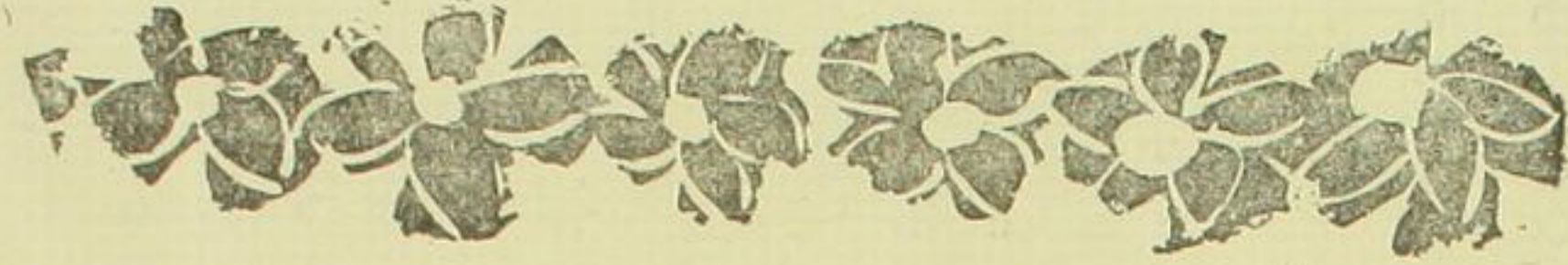
先づさういふ風で、僕としては坂本氏が一葉の日記を讀まなかつたものとは、何うしても思はれないのだ。若し、坂本氏にして、市島さんに面と向かつて、「一葉の日記といふのが世に出て居るが、僕はまだそれは讀んだことはない」とでも云つたとすれば、それは、坂本氏が何か體裁を作るためにでも云つたことではなからうか。

しかし、甚だ失禮なことではあるが、市島さんは一葉の日記が既に明治四十五年に公刊されて居る事をご承知ないのでなからうか。念のために一言して置く。

#### 坂本龍馬のこと

子母澤寛氏の『新選組遺聞』はもう十年ぐらゐ前に出た本のやうであるが、その巻頭の方の寫眞には、土佐の坂本龍馬(りようま)の少照と、坂本が暗殺された京都三條河原町の家の座敷の印畫が出て居つて、坂本は「少し白あばたがあつた。自己の才智をたのんで、態度が傲慢なので、同志のなかにも氣嫌ひしてゐたものがあつたので、云々」といふ説明が附いて居る。

ところが、僕の父親から聞いたのでは、坂本の顔には白痘痕があつたのは、事實であるらしいのだが、「武士半平太はヘンに願を食ひ反らしたやうな顔で、一見コチ／＼したまことに憎體な顔つききの男であつたが、坂本の方はでつぷりふとつた、何時もニコ／＼してゐるまことに愛嬌のある男であつた。京都へ出てからも、決して、人に怒りつけるやうなことはなく、同志の者などが、坂本に對して解らぬことなどを言ひ募ると、坂本はやはり、ニコ／＼しながら、「お前はさういふ譯の解らぬことをいふと、今度からわしのところへたづねて來ても、決して面會しないが宜しいか」といふ意



( 08 )

しをり  
はかこ  
身の上  
たのた  
各の  
周知の  
署名  
市島  
の  
署名  
市島



○加賀守とてその自家芝居の因縁の由を若干の條  
本として或る式（俗家）の二部を復し、洗雪亭傳  
と名づけし家傳の帖を心リ、主派を解説せし附  
して二三冊を凝し、自合も其の題を夫と  
かてんは、漸やく成印して其の定有るを  
此の以精妙の整定本に其の取らるるの名家  
本の内、可きものもあらず、上流の本の刻合  
物多し、ぬいじり、到底、金ある所の  
範疇を脱し、たゞ楽敷、自合のての定有る  
かんことを破す。

○近刊の拙稿「書物展覧」に早大因縁を述べた記が  
出て居る、彼等の尤物ハ概ね載録してある、此等ハ



皆早大の因縁の流るるもの、自合の因縁の文海である。  
因縁と彼等の因縁を書くと時の材料も、今早大の切  
り抜きと巻尾に在るもの、

○大隈侯生誕百年の記念に方々から思ひ出の記を  
出して二三應じしが、早編を載せし、何れも侯と軍部  
の關係を考へて見ればと思つたが、格別の材料の都合  
がよいので、僅く、軍人後援会なる長を、侯の事  
蹟（自ら自合が目撃した）三回を書き、列格  
て見れば、委曲を重ね、その流のの遺域に思ふ。

○次日諸格轍決（又その後）の遊支雜書を讀むが、  
その興を著くは、諸格の自合日記が、漢字のものを、  
久しく支那に在り、其の原書も、その支中  
の記録











つに如何を感し、此年仲夏に入ると、秋古の故味欲を  
抛ち去くのをコレシヨシと教へて、汝家へ移つた郷土三の  
松石山房の名刻七石谷四花のよみまきく、郷のまきを保  
せし一層印石方を留まりしと傳へるゝ根岸武者  
ハ傳むの豪家也、是振物の古き者也、其の家格の  
くしく、時々まき草の同や考証の世に出た、其の家格の  
換換ハ、モーン下の日本その口くして、訪問の途の記が  
収めてあるが、大略のまき草就して、むろことが出来る。

○近頃の故味家の内、下手物とを免集するぬ事家かち  
下手物とまき草の遺物の山に出来た、其の自今も同じや  
ふことをやつたに、餘りある、まき草の山に、油を  
をあのめ、これとある、下手物あり、この云のまき草の山に、田



ト故味の家也。日分りまきをやりし、動機は、あるは、家か  
ち、まき草の山に、自今も、故味家の山に、まき草の山に、  
まき草の山に、土地を、まき草の山に、まき草の山に、  
の家を、まき草の山に、まき草の山に、まき草の山に、  
の主人や、まき草の山に、まき草の山に、まき草の山に、  
つに、まき草の山に、まき草の山に、まき草の山に、  
贈る、まき草の山に、まき草の山に、まき草の山に、  
まき草の山に、まき草の山に、まき草の山に、まき草の山に、  
まき草の山に、まき草の山に、まき草の山に、まき草の山に、  
ル、まき草の山に、まき草の山に、まき草の山に、まき草の山に、  
の、まき草の山に、まき草の山に、まき草の山に、まき草の山に、  
別荘が、まき草の山に、まき草の山に、まき草の山に、まき草の山に、







床の側より茶具竹籠を置いた。この四脚を高くして二尺七八寸のものを一寸ヲツナヒてある。

火鉢の

朝鮮飯斗のつゝふんれいよふあつたから採用した。外に種柳を火鉢に採用し中々森のおこしを仕立てたのが暖る意を満ちて採用した。織瓶の代り朝鮮をその相場の大ききこの織瓶形の石鼎かどうしてつくるとせんれのを河比から採用した。此の石籠は湯が容易なところのよい所の特長がある。

相模盆の二の百の紅の杖を木地のまき高七三寸許を截ち切つて、一方に火爐一方に灰俵を

未のおこしれいれい田舎の茅庵とよくある。是れが、おの巧むる應用をんとあつた採用した。

穀面

去問の入口。樂為侯の書を刻した。樂為侯の杖を掲げた。ふんは、おのが落合所にもある。其侯の月列業の園に余れんれんあることが、侯は又由りて祀さんてみる。福侯の石の意を、たが、又園に確かん余の列在所也。ここのれからせんちらんれんか。

外に、めま庵の額を換して一枚（ふん板敷いあり）と休まぬ一ふが閑松庵と題した額



を方角よりけり。書斎の前は松が崖に踏み  
ひ風改をさすてあはれむとある。

茶器の類

鼓蓋重の風炉は摸して乾也かぬるれよ。茶  
湯沸しい塊のある部合を應用して作つた器  
品、茶碗は大雅をの<sup>（中）</sup>八仙を画して道人の作  
香炉はモリル製塔形のもの、香合は世製  
又市安作の木米の遺型が此のれち磁の  
犧尊、大葉子器は木製の摺鉢鉢（昔し  
こいの茶を磨り粉末うしれと云ふ）中ハすこ  
茶碗のことき、蓋が六牙けんをみる）香合は奈良  
薬師寺の古材を以て作られたり。

文房の類

都府橋の危研、季吟堂用の研、筆の銅を  
佛手柑の刺す<sup>（中）</sup>つて塗金（こいの金か哥老  
堂玩のもの也）程石は石心石の雲、南都古  
刹の遺材を以て池田村の朱を以て研箱  
浦上春琴の堂玩したる寸石の石（茶架  
代用）同刺を短梨、カンナを用ひて了る始的  
茶櫃、櫛したる二重文庫、時代ある唐櫃、  
等

茶の類

火、燈、自在カキをつきし、舟屋式の木の  
茶棚を四豆<sup>（中）</sup>。























○林虎相(長吉)といふ分といふ交む、あの善し(四)後の善し(守)  
 の部尾任時代から初めりてあり、あの欣賞合ととも(回)考  
 鑑と交む(連)との合ふんがある、とこゝをわく、今(見)まはら  
 稀に後世分と共、息つて十数年(交)つた。自分(互)ひ  
 家庭(世)来りてやうな交際(無)かつた、回(も)の交りの深  
 かつた。今思ふに、味家(い)う、あつた、林(の)こと(き)も、若(し)時(が)  
 風味(一)些(張)を(通)して、人(い)ふ、無(い)やうな思ふ、あつた、  
 右(も)申(送)の(意)を生(て)、お申(の)意(旨)を(受)け、(か)身体(が)益  
 弱(の)為(め)弱(を)い(ら)別(に)は(申)し、(う)ぬ(ら)所(に)随(つ)て(お)教(育)  
 三味(れ)日(と)送(つ)た。根(岸)武(者)や(山)中(共)古(や)海(井)正(重)ら(う)も、  
 交(つ)て(人)数(も)多(う)考(古)風味(を)耽(つ)た(こ)も(あ)る、(故)終(生)没

弱(れ)の(用)を(味)ひ(あ)つた。此(の)い(ふ)も、(暢)し(お)の(あ)つた(は)林  
 一(お)申(の)談(論)も(あ)つた(か)ら、(志)き(り)に(珠)者(の)意(集)を(お)つた。  
 回(め)り(て)彼(の)運(動)の(或)十(年)七(つ)き、(努)力(も)た(ゆ)つ(た)あ  
 り、(千)八(百)の(方)面(の)及(び)、(お)洋(文)の(意)を(通)し、(洋)文(の)  
 方(面)も(及)び、(時)々(ぬ)ん(の)話(の)も(し)た、(其)自(的)に(珠)者(の)意(集)を  
 校(定)す(る)も、(あ)つた、(あ)り、(人)の(呼)び(多)う(と)合(ふ)つ(た)ら、  
 随(分)ぬ(し)か(用)を(請)ふ(目)つ(考)証(も)も(や)つた、(得)る(終)つ(て)  
 の(用)を(自)ら(勝)つ(と)し(た)つた、(あ)の(人)が(珠)者(に)寄(り)て、(あ)の  
 無(地)の(意)を(こ)ひ(あ)る、(毎)日(の)合(ふ)の(女)の(人)が(自)ら(よ)う(な)お(と)  
 を(い)ひ(交)り(て)示(す)し、(お)孫(高)の(こ)も(あ)つた、(あ)の(人)の  
 回(も)を(考)す(る)も、(意)集(上)に(あ)つた、(去)つ(て)病(臥)し、  
 晩(年)林(文)七(世)を(あ)り、(た)か(ら)し、(じ)ら(う)と(最)後(の)本(を)



















よゆのひりておぼくして下らん。相も道をまきくへん天ま  
ももを成るるとまふ文書あつれば、何か冷文家こせ入  
しん一語とらるるせう。

大雅の流りすむに三岳道ある花のあふ程高山の波の深きは  
久松家と就て竹園大雅研究家、高松家静天壽と流り  
しん時、旅智の孫存の「金山縣八山園冊を以て其書をこ  
典して得とるるあり、又大雅の書の高の鑑定家が秘訣の  
按とるるあり、大雅の書あつれば、大雅の流りて其流りてい  
かまへた其書の流りて其流りて其流りて其流りて其流りて  
とらるるあり。

○余の挿架に木部の大印一歎あり、又文二曰く  
所刊書凡七百六十種二千八百三十卷五萬頁

四百五十花字

よゆのひりておぼくして下らん。相も道をまきくへん天ま  
ももを成るるとまふ文書あつれば、何か冷文家こせ入  
しん一語とらるるせう。

○余の挿架に木部の大印一歎あり、又文二曰く  
所刊書凡七百六十種二千八百三十卷五萬頁

よゆのひりておぼくして下らん。相も道をまきくへん天ま  
ももを成るるとまふ文書あつれば、何か冷文家こせ入  
しん一語とらるるせう。















弘文館、野道一以この書を以て其換南を四巻の  
さやうることあり。弘文館七段の破産一以かまひ  
刊り分り為りむらゝく無勘定無印、度のはりむら  
ひ。

才二期著作目録 鉛田三巻

赤坂義人著 二冊 日神遺一冊 今編

甲子夜話 三冊 續 三冊 杉浦清著

近世文藝書目 十二冊 今編

曲亭遺稿 一冊

黒川真秋全集 六冊

市定文編 五冊 五弓久文

文藝新纂 五冊 今編

神道叢書 一冊 今編

日本詩紀 一冊 市川定房

明月記 一冊 尾形定家

山良洪範 一冊 真田増春

山原法類 四冊 山原高久

ノ十四行 四十八冊

才三期目録

寧曲十七帖 附法曲末百番 一冊

近世俗謡集 四冊 本今編

官武通記 二冊 五七郎左大夫



徳田氏内書意	三冊	本分
新選系十種	五冊	本分
冊題書名	八冊	本分
冊題目録	一帖	本分
通航一覽	八冊	林輝著
武江年志	一冊	本分
文の海海身名	三冊	本分
萬葉集古義附考	十冊	藤持雅隆
全義解	二冊	惟宗直書
遠近格	一冊	高橋多一

以上

徳田氏

○去年の夏頃から甚だの研究家大勢一中士が思地  
 の生記院が志づく秋草人多を催し、自今より又都  
 心西の如くありしが、何分今より一時刻の如く主の  
 こころをいひて欠席するは、今も又版敗をを脱し  
 の今も午後開かるといひて、今も又版敗をを脱し  
 為元、因んばよのか何の花名中にもある、寝るの  
 らるくしてると、十點程にある。是を遺忘し、侍の  
 以んば今細にきく、色きりけりて、左の如くか  
 あり、尚道に就ての挿話も思ひ出さる、併せて記  
 七あり

十一月十五日相志了す



一 銀製蓮房香煙

一 敗荷金房朱の根付

一 蓮の墨斗 銅製

一 金房志蓮様佛具 表鏡鏡 大船山葉子墨斗

一 北洋架天漫画繪馬鏡 徳川幕府 國道今之松 下積の所

一 枕山観蓮詩 明和の初年 枕山を中心とした地 詩今と催し 時の意の詩

洞雪江の宮

一 當麻縁起 支那版 文政二年 翻刻せし 一回 徳島橋高の年か一本 の序文 文化六年 冬月 尾張 貞正寺 傳 實祐の刻と見ゆ

一 蓮の散華

一 五百山嵐の蓮の實 大船山 徳島 橋高の所 銀製の飾り

一 蓮の半刻圓基 鏡公座

蓮と名として人々因る家柄に蓮月和歌刻の花を賣り又長崎  
一通り芙蓉の蓮の別名又菫菫と云ふ大島逸記に芙蓉  
花の形より蓮葉と伏せし形と不二山に擬し芙蓉花と







○往年家傳ありて之を同出類と小長持と納めて列  
置いたるが有り、其の小長持の其後手七つ掛けありしが  
此の書意同書と浦へ申一家に保ありまゝに納りて  
若干ありし、此書も日録とて小長持に納りて置く  
べく、幸ひしものあり、少くも得たり、是れ納り  
こと、せり、其の品目左の如し

○徳川朝文書 一函 福徳文

○懐存文書 一函 懐公

○和文文書 一函

○松留室神成之記 初編 二冊

○家傳の歴史

○系譜 二冊

○家傳遺影 四幅

○三好お千守寸珍本

○松海いぬ書中庵合又一冊

○松海いぬ書白雪家巻法一巻

○西城友人画像二

○曾祖母母元歌行

○依久問象也揚言仲氏易序一巻

○秋月種村揚言仲氏易序一巻

○秋壺集 取本

○鄙作各五五 同上二

○徳志園記 一巻

○和文遺一冊



◎感海翁造印

◎先考遺墨印

◎三郎翁遺墨茶箱

◎恩賜三ッ但大銀杯

◎田中先歿伯予又客の多知紙一帖

◎前友一減一竹帖 余の切名入

◎奥平長正竹帖

◎前友奥平長正竹帖 一巻

◎坂口土峯鶴石在歌斐帖

◎白 詩一巻

◎先考遺墨字出草稿 家書

◎白 年寄本教註

25

◎大日本史 香本家蔵行爲年寄本

◎家廟遺墨 二巻

◎師友年簡 数巻

◎御人年簡 数巻

◎春城壽像

◎松屋記

◎蘇村小稿

◎書畫同出書立 大帳

◎花書子作品目錄

◎小精屋日誌

◎徳劍短刀

◎招名寄上



以上の内差あり箱の内の難きものあり、是れ  
印を附す。○印を附するは十二月二日納入の分也

追加

○伏見公書幅二

○主生卿二字軟紙書

○漢書臺談工紀念品

○明治天皇西遊下御影 希効

○伏見公手深瑞波巨硯

○前巻一誠遺硯



○時高の國庫金塊とありしこと急ぎ、最初に大印  
の意をうくるに遂に大印と決し先づ金貨幣二十  
日五枚十枚計二百圓也を日本銀行に大印此  
價五十七圓二十枚也金貨の差あるべし此金貨  
は大隈元久の遺物と熊子夫人とに贈るべし  
也尚金松を個一枚あるべし贈るべし金貨例大  
形徳中時計 并に大金銀外に金の小飾品と大  
人として東急のこりや社に託す代金とありし  
月給を要す

十一月十八日

○前記の如く各家の内の以て前記の如く文獻部にてある用を  
得てせんをガト納むる見も公儀とて徹書金と関する文を  
兼手あるもの天保九年の大火上の善法に献金と

文獻部

てある田畑をかり清むるが故なり、一三の五ヶ年賦であるが  
尚外患防備神佛の祈禱用金の内、上納金定年分  
二あるの清む清むる、方下は四年半變換祈禱用金  
金を山に五圓上納し、天保六年五月附の清む清  
むる、方又養元を、同五月五ヶ年賦金の額  
あり、吾家の災害ありしや家政の振へし、ことと曲  
ありし、うし、る此献金とる事と記出、長又方  
全額振、清むるを、上納の一事、書あり、故、  
んとして、の、は、三、月、の、日、出、て、ある、  
昔の善法祈禱用金、公儀の清用を  
七、後、市、島、迄、次、郎、く、り、仰、付、が、古、紙、出、  
書、南、土、あり、  
吾家の災害防備其他







家秋の時と最も思頃とまきし歎却下熱閑の地こ荒涼の  
景ももたへての秋の秋まへきん似たり  
十月十八日記  
○大谷句傳の白集我れ我れを讀む、句傳其うまき方の前  
法主を交りて、清むとてわらわらふ少興味を覚ゆるものあ  
り、左の表干首と挿あり、

偶感

曲のなや淫耳に入りよき轉の

物笑ふこころも来ん人の世や  
舌福得れ口を為る舌に埋めしか

咲くも散るも玉のかささるる秋の世こそ  
音福入透ひこ

枕上今年一鉢の表親も

朝解

皇後威の皆木の女牙吹く田山河

昭和二年三月三日の浪浪の沖刺をさす  
畏み

菊の香の永久に人の世に包みけり  
春のあけの流るるやうに流るる行く

師徳

音ろくも涌井戸澄る春のあけ  
聴きなぬ鏡の音のあけのあけ  
勿体もや祖師は紙衣の九十年



鐘一撞止く一撞遠くも此風

人夢んたる時ハ蝶の甘き蜜を食ふか如くおとろく  
ぬんかおとろきさを食ふ時ハ今この世の人  
心ちこましくも亦あらん

秋近き扇のいひのよれくりに

人の世の歩みはと問ひんて  
信心の外に世にさき涼一とよ

凍徹す銅鼓に心身を澄す時  
意をかいて勅化に報のさるのすき

秋風秋近

春風寒く萬草の血に骨枯れん

木凋るや下駄穿きて挽く人力車

紅葉ももせのうれし元悦寺

寧ろ花はゆれもれし小菊をめぐりて

落る合うと川の名ははる紅葉も

八束紅輕仇涼華の世らうこま

鶴ゆるく種時く人の頭上飛ぶ

○自人の常りて事の本意ある程をいふことをいふは其の意が

和とらふをいふは、ぬめれことある、此のフト思ふ人の

一生の種々の種々な心ある、此の心から見え、意がとらふこ

とが他人である、實に深の交りのうへ人が相争つてよい可減ん

想い、此の所、所謂、自分極めが、實際と距離、距離する場合

に意外と感する事ある、有り餘ること、敢て怪あふこと

らぬ、是の免る角、自人の種々を振り返つて見れば、其の











自分が主戦せよとの旨を奉りてある。四民養育を行ふ時  
いさうく多数の侯の縁故ある侯の邸へ令り、養儀多  
裕といろく容喙せしが、自分の意見を以て馬牛として飽也  
陸合の方針と固守し、一息にこれをやつてくれぬと堀内  
將軍ハ腹巻の干戚を表外に感ぜ、あんをいふかやう  
まゝいと軍言ひて大将に必とも方針を度するにあり  
が表の終始一貫せしむるも動かぬ、是ハ三軍を率へる器  
也と褒められしが、自分が取つて是の賛成せしむる  
自分がつらきか感れしこと、故ら多くきんが目前に  
一に奉祀して入寮ししことの内、大なることありしことか  
也。最初は侯の批合に左の如く伺つた、**奉祀せしむる**  
に於けるおそきおそき事柄の轉任して副典州とすべしと

奉祀

の、自分が誹毀し相争ひありしに、陰險手段の自  
分を随分苦められ、其内批祈の判決は長命の裁判所  
に移され、日下、學問に服従することとありしが、自分  
も取つて、其の社会にあつた、其の老翁の先年大  
胆誠切に書比る格、自分が沈黙能く美徳の  
おれの心、ちの異状、内命を下し、とて、自分が終  
始下官を遇し、自分が批別下は、後方の優遇を  
監獄の命に著書せしむるやうな氣味、おれ目を送る  
夜間、こと異あり、寝たが、口中も、物、小使部、冬  
九、まんが、あめ、健康と格、ことせらる、列寧の冬、  
過し、れが、えん、今、期せし、仕合、其、  
つれ、ことを感ずる。

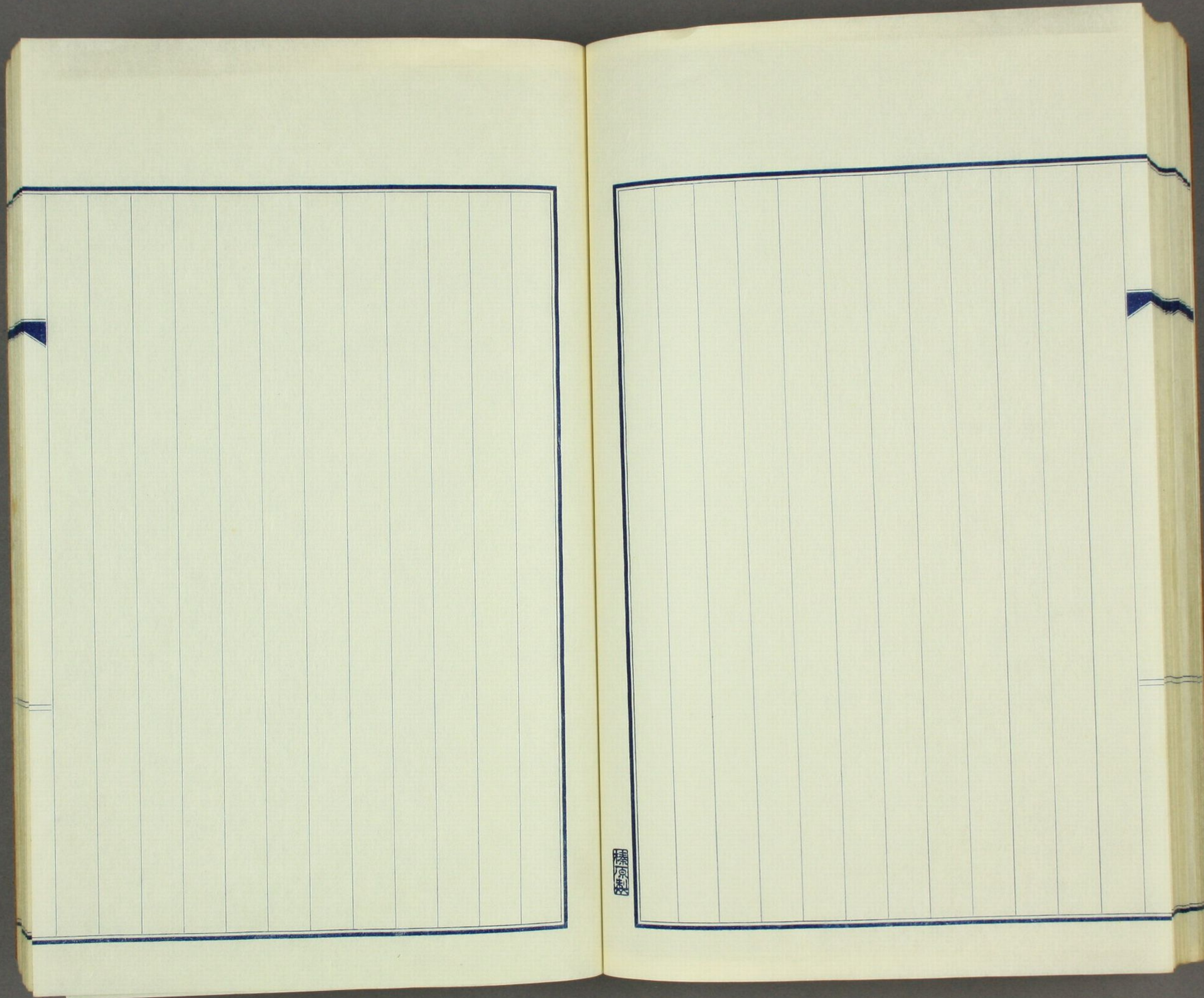






を考へせしあることであつた。井上の改革案に可なり大谷家にお  
して苛酷のものがあるのは大隈侯の援助を乞ふこととさう  
なしく感じれば自分も何等あるべき力も無いのびに  
三日玄智の秘録を讀むに及ばぬと候ふは又その報  
先をさし、是れ切りに此事件の關係を絶つたが如きことか  
つたものと考へしと思ふのである。





補河世



の仙臺、池、ふらふら、薄紅、獨眼、龍、白、字、の、廟、を、修、め、  
可、か、考、へ、あ、る、。廟、地、ハ、高、い、丘、に、在、り、天、を、摩、す、大、木、が、境、を  
出、家、と、し、。皆、も、主、派、の、廟、地、に、あ、る、。廟、ハ、木、造、の、大、き、な、を  
ら、ハ、か、ま、え、の、瑞、鳳、殿、に、殉、死、の、武、士、十、名、の、墓、が、此、の、廟  
の、圓、圍、を、繞、つ、て、あ、る、。目、今、ハ、あ、ら、な、い、事、が、あ、る、が、此、の  
殿、の、建、築、と、變、つ、た、所、が、あ、る、と、言、へ、ば、こ、も、あ、る、の、が、別、に、注  
志、を、拂、い、し、う、ら、に、か、秋、山、空、轉、の、係、中、に、此、の、廟、の、建  
築、と、就、し、左、の、如、く、記、し、て、あ、る、。

瑞鳳殿の見どころ左程大きくも無い伊達家の家  
廟のあり、一寸見ると何んやらものか、又んか見ると智  
くことばらう。

先づ同一物が一つとある、こゝろを思儀する、此の寺の

中には、何か同一物があつた、と、四つと撰、つ、て、  
一つとある、

才一に門柱、こゝが、新、つ、て、あ、る、一、方、五、尺、六、寸、一、方、四、尺、九、寸  
と、あ、る、瓦、一、寸、一、寸、五、分、格、子、の、目、に、一、寸、五、分、全、部  
違、つ、て、あ、る、。三、の、次、の、四、分、あ、る、と、い、ふ、具、合、の、利、を、取  
へ、と、あ、る、。庶、片、方、が、二、尺、五、寸、片、方、が、二、尺、五、寸、と、あ、る、  
又、庶、片、方、が、二、尺、五、寸、片、方、が、二、尺、五、寸、と、あ、る、。又、庶、片、方、が、二、尺、五、寸、  
の、大、き、さ、が、一、寸、一、寸、五、分、三、寸、と、い、つ、た、具、合、の、違、  
つ、て、あ、る、。金、具、の、打、つ、鉦、針、も、あ、る、ま、い、片、の、方、つ、  
特、別、に、拵、つ、て、あ、る、。穴、一、つ、で、は、同、じ、鉦、の、目、に、  
穴、ハ、一、つ、と、あ、る、。

全部が全部一つ宛違つてあつた、同一物が決つて二つと



るい

斯く視て見ると、實に驚くべき建業心あり、何んぞ不思  
儀な建業の監視にあらざる。

時間、往費、其の甚心、えんや、爾迄その奴力に大い  
とあつたれば、お通るい、建物は、小うと考へ、其の  
狙いのあらざるも、世界、二つとある、今、つくり  
的、な建業のあらざる。

而して、政宗が、目撃したところ、何んかあるか、まゝの  
個の大教訓である。

人、千人、集つて、同じ人、一人、も、さういふ、皆、通つて、みる  
一から、十、まで、同じ人間、の、みる、まゝ、あつた、通つた、人、の  
の、集まつた、あつた、上、の、まゝ、の、考へ、つた、まゝ、の、

候べ、治め、行く、ことが、ある、と、さういふ、意味、がある。  
北、人の、顔形、や、心持、の、違つて、みる、治め、る、人の、心  
次、の、心、まゝ、の、統一、ある、四、家、が、出、来、ると、いふ、こと、と  
政宗、北、廟、一つ、の、儀、を、現、定、の、教、訓、した、の、あら

の、時、校、友、の、信、の、某、が、二、三、山、陽、の、物、を、高、く、一、鑑、定  
を、求、め、来、たり、と、中、の、全、紙、一、枚、に、氣、を、書、し、  
ニ、山、陽、の、用、印、四、五、十、枚、を、校、し、上、部、に、例、の、書、と、世  
と、同、行、の、旅、美、元、流、氏、の、如、く、と、ま、の、詩、を、考、へ、と、  
その、と、り、え、た、山、陽、の、三、十、十、幅、の、錦、の、幅、の、書、の、石、紙、の、  
通、脱、の、真、蹟、物、の、ま、の、ま、の、物、の、前、の、六、字、の、名  
部、と、考、へ、山、陽、の、一、と、見、れ、ぬ、ま、の、ま、の、ま、の、ま、の、







葦村秀翁帽<sup>り</sup>中<sup>り</sup>

道枯<sup>り</sup>池<sup>り</sup>め<sup>り</sup>こ<sup>り</sup>き<sup>り</sup>き<sup>り</sup>く<sup>り</sup>ん<sup>り</sup>丸

日句を記あれ

攝津大塚 旭<sup>り</sup>日<sup>り</sup>夜<sup>り</sup>秋<sup>り</sup>の<sup>り</sup>小<sup>り</sup>燈<sup>り</sup>

おめとま<sup>り</sup>

どろ<sup>り</sup>く<sup>り</sup>の<sup>り</sup>凡<sup>り</sup>も<sup>り</sup>さ<sup>り</sup>む<sup>り</sup>く<sup>り</sup>柳<sup>り</sup>の<sup>り</sup>を

の<sup>り</sup>白<sup>り</sup>ひ<sup>り</sup>影<sup>り</sup>と<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>れ

田朝<sup>り</sup>公<sup>り</sup>を<sup>り</sup>遠<sup>り</sup>摩<sup>り</sup>と<sup>り</sup>画<sup>り</sup>れ<sup>り</sup>柳<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

山中<sup>り</sup>無<sup>り</sup>所<sup>り</sup>日<sup>り</sup>と<sup>り</sup>起<sup>り</sup>し<sup>り</sup>

眼<sup>り</sup>を<sup>り</sup>と<sup>り</sup>う<sup>り</sup>て<sup>り</sup>艾<sup>り</sup>室<sup>り</sup>め<sup>り</sup>け<sup>り</sup>り<sup>り</sup>霞<sup>り</sup>の<sup>り</sup>音<sup>り</sup>

因<sup>り</sup>沙<sup>り</sup>流<sup>り</sup>を<sup>り</sup>早<sup>り</sup>山<sup>り</sup>を<sup>り</sup>流<sup>り</sup>れ<sup>り</sup>時<sup>り</sup>舞<sup>り</sup>舞<sup>り</sup>甚<sup>り</sup>か

甚<sup>り</sup>し<sup>り</sup>と<sup>り</sup>初<sup>り</sup>冬<sup>り</sup>、<sup>り</sup>其<sup>り</sup>一<sup>り</sup>の<sup>り</sup>雨<sup>り</sup>而<sup>り</sup>か<sup>り</sup>出<sup>り</sup>て

わ<sup>り</sup>比<sup>り</sup>。ま<sup>り</sup>ん<sup>り</sup>の<sup>り</sup>早<sup>り</sup>山<sup>り</sup>等<sup>り</sup>と<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>れ<sup>り</sup>か<sup>り</sup>い<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>

出来<sup>り</sup>と<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>れ

角<sup>り</sup>紙<sup>り</sup>大<sup>り</sup>刀<sup>り</sup>山<sup>り</sup>の<sup>り</sup>函<sup>り</sup>字<sup>り</sup>花<sup>り</sup>の<sup>り</sup>扇<sup>り</sup>

其<sup>り</sup>扇<sup>り</sup>の<sup>り</sup>扇<sup>り</sup>面<sup>り</sup>

七月<sup>り</sup>七<sup>り</sup>日<sup>り</sup>に<sup>り</sup>至<sup>り</sup>て<sup>り</sup>其<sup>り</sup>扇<sup>り</sup>を<sup>り</sup>感<sup>り</sup>し<sup>り</sup>と<sup>り</sup>扇<sup>り</sup>大<sup>り</sup>天<sup>り</sup>流<sup>り</sup>る

出<sup>り</sup>ぬ<sup>り</sup>茶<sup>り</sup>屋<sup>り</sup>の<sup>り</sup>吹<sup>り</sup>く<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>ん<sup>り</sup>を<sup>り</sup>甚<sup>り</sup>か<sup>り</sup>

外<sup>り</sup>に<sup>り</sup>教<sup>り</sup>坊<sup>り</sup>傳<sup>り</sup>像<sup>り</sup>か<sup>り</sup>出<sup>り</sup>れ<sup>り</sup>と<sup>り</sup>ん

茶<sup>り</sup>屋<sup>り</sup>の<sup>り</sup>茶<sup>り</sup>を<sup>り</sup>牛<sup>り</sup>枝<sup>り</sup>後<sup>り</sup>秋<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

法<sup>り</sup>果<sup>り</sup>自<sup>り</sup>然<sup>り</sup>成<sup>り</sup>

の<sup>り</sup>一<sup>り</sup>行<sup>り</sup>物<sup>り</sup>か<sup>り</sup>招<sup>り</sup>け<sup>り</sup>ん<sup>り</sup>と<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>れ

(今<sup>り</sup>の<sup>り</sup>記<sup>り</sup>十<sup>り</sup>月<sup>り</sup>廿<sup>り</sup>四<sup>り</sup>日<sup>り</sup>相<sup>り</sup>見<sup>り</sup>す)







一冊を宛名を寫す。こゝのあはれ書次も刊行を助ぐればよか  
らうと、大群志に及の遺書に注ひしよし也。此考ハ七  
と森三之の所載本より、書之首部は之之の書入あり

此書宮内省ハ所撰即白書也。初名七井金村  
印辨素玄文也。政元保尚任在下谷。不忍池畔  
茅町房。當時書画刀剣茶器等。鑑定こ

名家云

松園 森立云

是書、或る所くあるも素玄と云ふ人歟。信ハハ  
志ハシ。此考を讀む、相中の書詞も亦、素立云  
るべく、造詣の深き也。其の言ふ不多く、實、駁る出づ。今  
首肯せしむる者多し。此人著の時、自分の家、傳へりし



實之の書物も當時の徳を云ふ。胡麻化せんことをが  
ちり、是ハ懐概して自ら究の終へ、檢定家と云ふ者  
く、四書書其他の檢定口也。素立、其難きことあり。其  
良出の考も稱也。是考著者ハ刊行を期し、其考し  
か、遂と其目的を達せしむ。ある文を、入ししが仕合  
う。今刊行せしむる者、其考也。十一月廿六日記

○目録の脚注の考に、信ハハハ、姓を旅任考志路し、其考し  
由利の文、其法ハ、出づ。其の鳥井権之助のこと、其考し  
こゝに、出づ。其考し、○有るも、考るも、其考し、其考し、其考し、  
こゝに、其考し、其考し、其考し、其考し、其考し、其考し、  
は、由之を所拂、其位、其考し、其考し、其考し、其考し、  
父、其考し、其考し、其考し、其考し、其考し、其考し、











残柳敗荷をよみて詠いた詩がまゝかといふ帳を解りて抱き見よ

残荷落葉舞 魚鱗流 音柳飄 絲鬚 鷺頂涼

いふ句がある。正しく不忠此詩今の星をびある

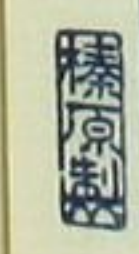
東台の暮日氣よあさハしい句ハ

鴉陣 遠多 烟火 寂 露痕 涼入 亦 遠 橋

白かハ山陽の次きの詩をよみてわつて居るが山陽の地を押

巻首 元はから 爰に けりぬきと 存しと あり

巻首 元はから 爰に けりぬきと 存しと あり



頼山陽詩書

(詩書共晩年之作)

(紙本條幅)

帝掬芙蓉雪 抛心泉 崩山雪 計  
已黃河 却向東海還

先事林山 遠岳 不 能 言 心 難 言 索 云 下 南

藤田謹也

東京 藤田謹也氏藏

〇高の富士ハ本年中ハ果高床あり此ハ先角法方  
向ハ秋の敗荷をよめて詠いた詩がまゝかといふ帳を解りて抱き見よ  
いふ句がある。正しく不忠此詩今の星をびある  
東台の暮日氣よあさハしい句ハ  
鴉陣 遠多 烟火 寂 露痕 涼入 亦 遠 橋  
白かハ山陽の次きの詩をよみてわつて居るが山陽の地を押  
巻首 元はから 爰に けりぬきと 存しと あり















○今宮造り好の校友西川太次郎中々山陽の夫人の（き）た  
の書状到来

前日多々平判のせきりし頼朝末御夫人の生誕地  
去年好の正徳とある年、先月建碑式に冬列  
主に尚書後神考らるんが勢範夫人の四女御也  
生地三津尾に在り、夫も十二日有る、滋加好好  
生郡西大路に親戚大崎嘉兵衛と表ありんが  
七宗部に初孫とせ、入京十八日有るに石立瑞方  
にまらぬし、去月建碑後頼朝末御夫人の  
三津尾の碑に先代生家因延の家の高主  
と評のせかえん、ゆえり

此のち、これ、海く、木崎好者の海く、これ、頼朝末御夫人の生誕地



跡に、此の海く、頼朝末御夫人の生誕地三津尾の里の  
今江江り大上新城の村の湖岸、南に唐崎神社か  
う程近く、本寺嘉寺池田徳寺前、とこころの嘉家  
とて、ゆゑて、ゆゑり、か、延の、右、右、二、つ、の、宅、ひ、あ、る  
木崎の、酒、造、り、と、頼朝末御夫人の、寛政十二年、四月、二、日、の、  
此時、京都、六、坊、嘉、兵、衛、の、妻、の、女、と、ま、り、ん、が、大、崎、の、家、の、  
主、家の、正、徳、と、同、じ、に、頼朝末御夫人、又、一、つ、か、七、女、と、い、ふ、に、頼  
朝末御夫人の、生、誕、地、に、は、横、儀、の、跡、を、  
捲、く、お、其、の、機、形、工、に、山、形、へ、を、か、え、て、ま、る、こ、ろ、  
山、工、を、呼、ん、で、現、る、ま、ん、を、焼、印、し、て、農、具、を、か、え、り、  
し、る

山崎寺の北、頼朝末御夫人の、生誕地、一、つ、か、七、女、と、い、ふ、に、頼



の姉と申すは此の姉の正の家の男を既と申すと、同寺  
へ嫁し妹は寛政十二年七月十九日「京都大徳寺」に生れ  
嫁す(善の)と見えたりとありて、女とも五代目とある  
二つ「了親」良「物親」の子なりといふ言ひんことあり、且  
代目「安永」六年九月五日の日記とあるあり、**梨麩**の生  
れは寛政九年といふことあり、**符念**一といひ、**六代目**の**五代目**  
の知りあり、**彦根**か、**末**て、**多**る**実子**ぬい、**の**社**の**入  
知事なりといふ、**寛政**十年八月十日、廿二日、**寛政**十二年  
(**梨麩**二才の時)といふことあり、この女は、**の**つと、**梨麩**が  
生れ、**姉**も同腹にあり、**と**見えたり、**梨麩**の、  
**梨麩**の姉の一人、**え**は**四徳寺**に嫁してあり、**その**寺に  
**秋支**の、**の**公儀を、**お**り、**傳**つてあり、**と**見えたり、**梨麩**の、**二**

の、**大**の**家**と、**秋**の**家**と、**結**ひつゝ、**佐**の**家**と、**次**と、**礼**  
**婦**も、**備**の**終**と、**見**まゝに、**漢**し、**素**の**土**、**新**の**成**  
**一**の**字**の**陰**、**移**り、**歎**す、**二**の**親**、**心**も、**入**く、**と**、**頼**ひ、**伯**  
**母**と、**結**ひ、**君**の**心**を、**後**り  
**と**見えたり、**と**見えたり、**と**見えたり、  
**叔**留**大**の**家**、**大**人の、**行**つ、**と**、**加**へ、**時**に、**王**の**父**、**母**と、**む**  
**拓**き、**獨**り、**伯**の**母**と、**む**、**伯**の**母**、**即**余、**其**の**む**、**と**  
**甥**後(又、**二**の**一**、**支**の**母**)**再**行  
**と**見えたり、**大**の**家**の、**南**の、**支**の**母**が、**母**方、**叔**の**父**、**梨**の**麩**が  
**之**の**姉**と、**あ**る、**と**見えたり、**天**保三年九月廿日、**山**陽、**美**の  
**式**の**時**、**焼**香、**帳**の、**記**録、**と**見えたり、**横**屋、**嘉**の、**六**の**衛**、**其**  
**人**が、**即**ち、**大**の**家**、**支**の**代**、**梨**の**麩**の、**善**の**父**と、**あ**る、**と**



和歌集のゆかり

和歌集の成立は、いつて、延喜式天皇の御代、弘化三年、壬午、七月十七日、乙丑、丁酉、の御代、  
御代、  
御代、

御代、  
御代、

支那の書、麻美子、三州の書、三子

和歌集の成立、延喜式天皇の御代、弘化三年、壬午、七月十七日、乙丑、丁酉、の御代、

山陽の書、  
山陽の書、

和歌集の成立、延喜式天皇の御代、弘化三年、壬午、七月十七日、乙丑、丁酉、の御代、

和歌集の成立、延喜式天皇の御代、弘化三年、壬午、七月十七日、乙丑、丁酉、の御代、



見入るる

三州の書、  
三州の書、

支那の書、  
支那の書、

三州の書、  
三州の書、

和歌集の成立、延喜式天皇の御代、弘化三年、壬午、七月十七日、乙丑、丁酉、の御代、

和歌集の成立、延喜式天皇の御代、弘化三年、壬午、七月十七日、乙丑、丁酉、の御代、

和歌集の成立、延喜式天皇の御代、弘化三年、壬午、七月十七日、乙丑、丁酉、の御代、

和歌集の成立、延喜式天皇の御代、弘化三年、壬午、七月十七日、乙丑、丁酉、の御代、

和歌集の成立、延喜式天皇の御代、弘化三年、壬午、七月十七日、乙丑、丁酉、の御代、

和歌集の成立、延喜式天皇の御代、弘化三年、壬午、七月十七日、乙丑、丁酉、の御代、

和歌集の成立、延喜式天皇の御代、弘化三年、壬午、七月十七日、乙丑、丁酉、の御代、

此一項、  
余の  
補







書小野東洋先生遺墨後

嗚呼是小野東洋先生遺墨也回憶明治十五年余

歲二十三与砂川雄峻同庚俱從先生遊于房州演

說改進黨主義於各地時有請先生書者輒乘興揮

毫此書亦為其一屈指既五十六年矣先生卅一時頃者

吾友佐伯篁溪偶獲諸房州裝潢見示展而觀之筆

舞墨躍雲煙落紙之狀髣髴映眼恍有侍几筵之想

而先生墓木已拱雄峻亦化為異物其存者獨有余

而已耳俯仰今昔不勝追懷之情乃叙此書來由以

還篁溪聞此詩先生弱冠留學英國時遊獨逸中秋

下來因河觀月于舟中而賦者云昭和十三年十二

月春城市島謙吉拜識時年七十有九

竹

竹



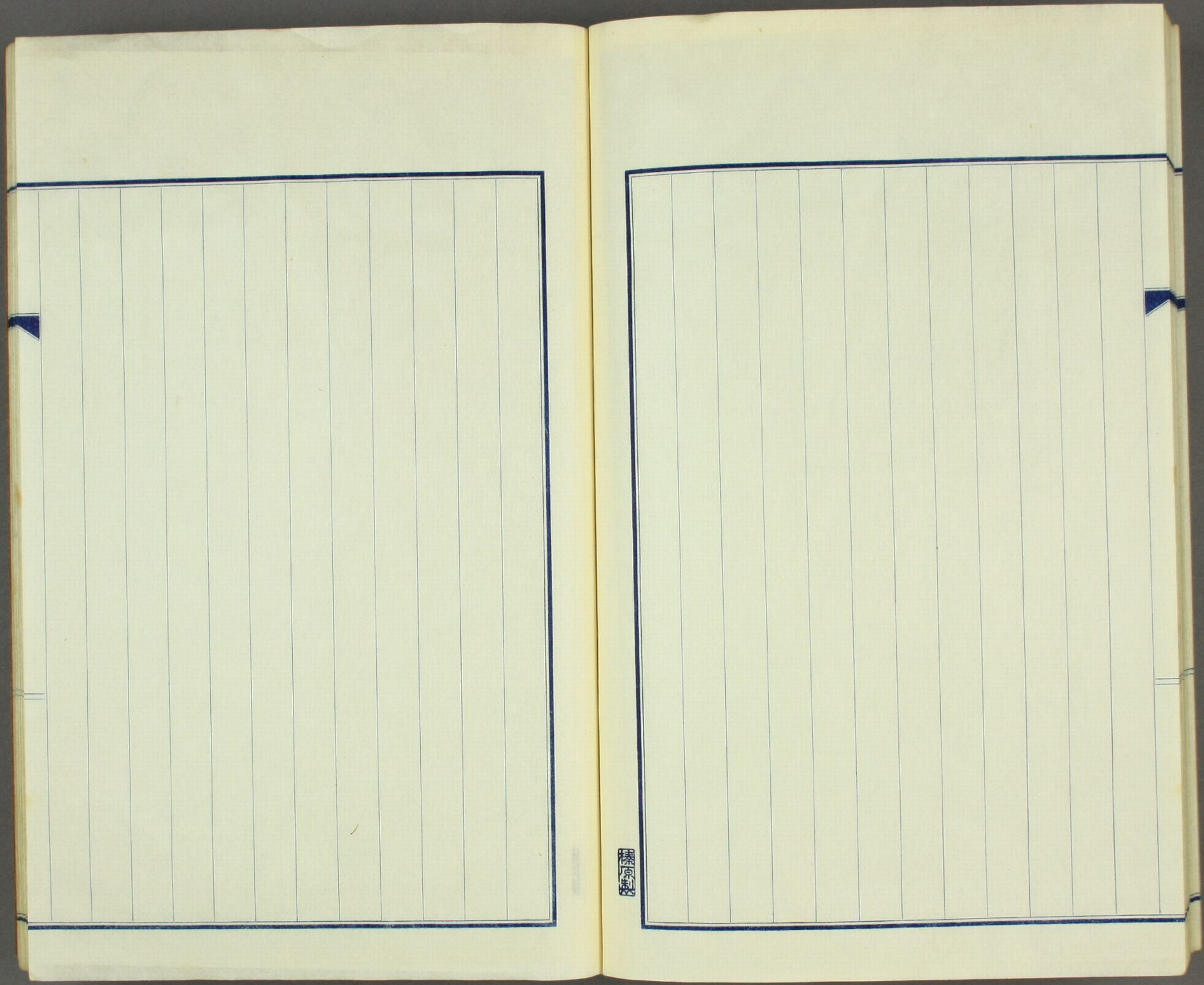




二万圓大隈の夫人の遺物と熊子の自の世あり所也  
日本銀行の紙幣の三万円と紙幣一萬七千七百と仕  
拂の金貨の差に相高の差ありこと見え金貨の  
中より三万円と仕拂の金貨とをとり、此品金杯  
一、金時計一、金鎖、金印、金メダル、金目録、金  
目録、此等の報法に九万九千四百四十五圓の報  
償と報し来る前報の償と合すと八千五百  
圓、此の定期預金として保取するを期(十二月)







陳心淵



早稲田大学

# 親友高田を語る

## 計を聞いて 市島謙吉

本年一月から病勢に就かれた高田博士の吾等が同窓の期待其の甲斐なく余命の爲め終に不歸の人となられた。命數已むを得ずとして、切めて八秩の歳を迎へもう二月月長らへて貰ひたかつた。博士は七十九歳で既に八十の壽を期して居られたのに、寔に残念のことであつた。

自分は博士と同窓で同郷で、二十歳頃から殆ど六十歳の友誼をつづけた。そのみならず博士の一生の事業は種々あれど自分はその大部分の共同者であつた。委しく云へば自分は博士の副官らしい地位に立つて、その行徳を同じふした。博士は常に云はれた、僕は何より早く死にたい、多分君は僕の經歷を書いてくれるであらうと、この言が事實となつたことを思ふと胸が塞がって哀愁の情に堪へな

い。自分は博士の事業を継ぐ能力は持合せないが、博士の生涯を通じて知る者の一人であるには相違ない。

博士の生涯を語る機会は何日あるだらう。今は唯思ひ出のあるものをアット・ランドムに語るに過ぎぬ。先づ學憲時代の事を追憶すると、君(博士と呼ぶ)は早稲田以下(君と呼ぶ)の才能は早く書生時代に知られ、君はいつか同窓の價値をリードした。君は英文學に相當の天分があつて、學憲時代早く小説脚本を講じ、幾多西洋小説を翻譯した。若し君が文學に専らであつたら坪内逍遙はひとり文壇を覆ふに足りなかつたであらう。併し君は早く方向を實務に轉換して政治や教育に携はつたので、遂に稀有の教育行政家となつた。君は英國の歴史に通じ殊に英國憲法に精しなかつたので、初期議會に列した頃は憲法學者として

て全名があつた。君は大隈侯の帷幕に在つて、立憲改進黨の創立に與り後には文相として入閣もした。君の政治的生活に語ることも多いが、しかし、君の志は學教育に在つたので、政治的議會に最少年齢の範圍に在つた君が、剛腹の星議長を彈劾し



て院外に放逐したことの如きは議會史上水く傳はるべき偉績で、君はこのことの爲め愚漢の兇兇に負傷したけれども、君の政治生活は短いながら華やかなものであつた。

君の生涯の大なる功績は何といふても早稲田大學を設立したことである。君はこれがため四十年間

奮闘なく心血を流した。君は學長職長となる前に久しく學監の職名の下に努力した。其職名の如何に拘らず、終始事實上の校長であつた。東京專門學校時代には、或る勢力の壓迫が激しかったので、それと闘つて屈しなかつたのも主として君であつた。後に學校を大學の地位に進め理科を附けに至つたことを初め、熾然たる諸學科を整備し、大學の面目を保たしめたのも皆君の規畫に係るものである。

君は學校經營の余力をもつことが出来ぬ、それは他日に譲るとして君が經營力に就て聊か語

つて見ると、君は吾等同窓者の期待以上の經營家であつた。君は決して許敷の頭腦の持主でなかつたが、君の常識は何事をもなきしめ又實て語ることもなかつた。君の實行力は實に盛んで一事を成し終れば更に第二事に移り、常に仕事を進めて行き少しも倦むことなかつた。その積年の努力の効が、早稲田今日の隆盛を生んだのである。

或る方面の學界は曾て君を許して俗物と云ふたことがある。これは偶々學者不似合な知才を豊富に有することを云ふので、君のメリツトを損ふものでない。君は斯る批評を受ける程世間的事業上の才幹があつたから、一學府を掌り立て得たのである。君が學界に到達し推尊する、大學者であつたとしても、唯個人として偉いと云はるゝに止まつたであらう。これは早稲田の發展で多數の人才を造就したことに比したら、固より言ふに足らないであらう。

君は學校經營の余力をもつて、學校に附屬出版部を起し、

又別に二大會社を起して共に成功した。其一日清印刷會社であるが、これは成功の後秀英會社と合同して、今は大日本印刷會社として斯界を雄視してゐる。他の一日清生命保險會社で、これは君の支那の旅行の留守中、高等商業學校の出身者と吾校の出身者が共同で一社を結ばんとした時に、君が旅より歸り、共同を非としたので、早稲田の地盤を利用し單獨に經營するとなつたのである。君が當時早く他日を洞察して共同經營を非としたのは一見識と見ねばなるまい。

君の積年の勞は神經衰弱症を生じた。其第一回は洋行中歐洲の大戦に遭遇して歸朝の後の症は可なり君を苦めた。幸ひに癒えたが其後又再發して到頭大學總長を辭するに至つた。今度は三回目で飲食を服ふの症候で僅に酒で覺醒を取つたやうな仕末、若し酒を飲んでもあつたら或ひは死期を早めたかも知れぬ。返すも、君が八秩を目前に控へてそれに及ばざりしは遺憾の極みである。【寫眞は喜壽の高田博士】







本大學前總長高田早苗先生病氣の  
處十二月三日午前二時四十分逝去  
被致候間此段御通知申上候

追て十二月五日午後一時より二時三十分迄本大學  
大隈講堂に於て大學葬を以て佛式に依り告別式執  
行可仕候

昭和十三年十二月三日

早稻田大學

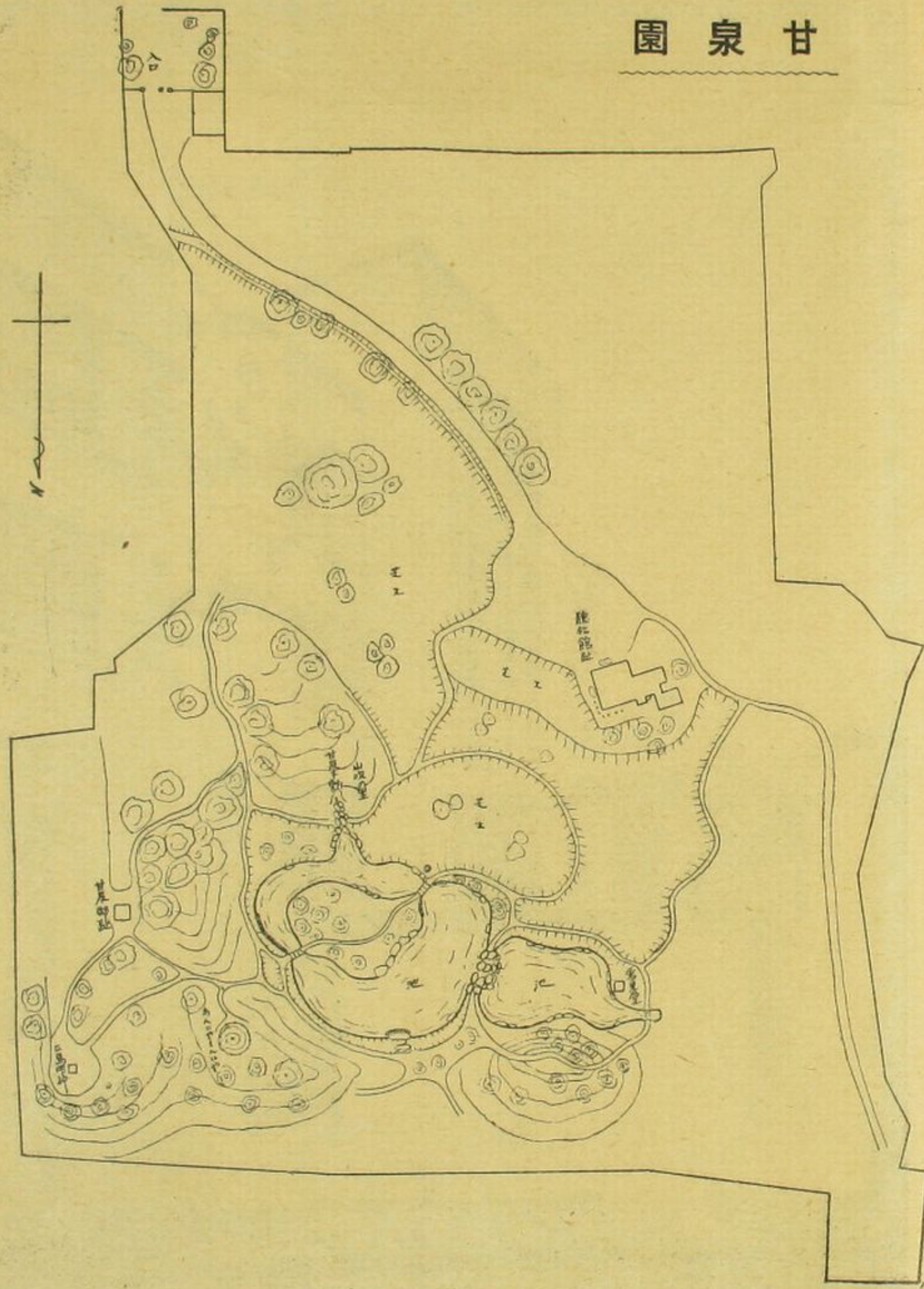


浴施の后皇明光

のもたつあ卷十二は巻繪此・るあで繪の安琳眼法芝・書詞の順公務寺・たつ探らか起縁寺大東  
は浴施の后皇明光るあてし書奥を由の事が全禰門沙進勳年元天文・でのたしと巻三てし約抄を  
巻繪・のもるなと鑑の性女も今は心御いし々誰の后皇で事御いしはるうも最てしと仕奉の性女  
湯らか間のり張子の實の殿湯に珠・るあてび帯を色代時は等様模の内殿湯・口焚籠蓋るけ形に  
るあで構繪の呂風蒸くし正はのつ立の氣



### 甘泉園



## 甘泉園 公開放

甘泉園即ち新校地となつた舊相馬邸庭園を十月二十五、六の二日間開放したが、本園は由緒深き庭園であり、且武蔵野の一角として、有名な「山吹の里」を始め数多の舊蹟を遺してゐるので、家族連れ立つての入園者夥しく、日頃は静寂そのものゝ庭園も時ならぬ賑ひを呈した。

先づ入口より並木道を通つて行くこと約半丁餘廣場に出る。此處が聽松館跡である。この廣場を突き貫け、甘泉園の森を右に見て西への斜面を降り、木立の細路を右へ折れて少し行くと、「山里の里」の舊跡があり、「甘泉銘」の石碑が立つてゐる。そこから數歩、右手「甘泉不動」の下より流れ出づる泉は潺湲として溪をなし、「山吹の井」に漉となつて落ちてゐる。此邊りまことに森閑たる溪谷を想はせる。この溪を涉つて木立の下を出で、爪

先上りに登つて行つた處が「甘泉邸跡」である。此處から南へ向つての眺望は甘泉園中一番深い。これに續いて三島山となり山頂三島明神の禿倉がある。深山の趣其儘を残してゐる能篋路を一氣に下つた處、亭々と聳へ立つ古木が「あんにやもん」にや。此處から池畔に添つて老松の間を道が走つてゐる。山吹の井は甘泉を溜めて清冽、池底に沈む落葉の數さへも算へ得る。池は岩に堰かれて第二の池に落ちる。池水の末小川となつて流れ去る所に「雪見堂」がある。堂内に坐せば、山吹の井を経て三島山、甘泉邸跡、更らに甘泉園の森が一眺の中にある。雪見堂を出で池畔を廻つて、躑躅の茂みを分けつゝ芝生の坂を登りつめれば、元の聽松館跡に出る。以上は大體の順路を書いたのであるが、本園の來歴等については、別項「甘泉園の記」を讀みたい。







し、天明五年五月二十六歳で瀧川兵庫助一貞(毛利周防守高丘の五男で大學利廣の養子となつた)の養子となり、采地四千石を知行し、六年十二月中奥小姓、七年三月、從五位下長門守に叙任、小普請支配を歴て、寛政十年十二月甲府勤番支配に轉じて出羽守と改め、文化二年七月西丸小

性組番頭となつて安藝守と改め、四年三月本丸に轉じ、五年九月病によつて辭職し、文政三年十一月致仕、五年六月十二日卒す、年六十三、下谷廣徳寺に葬る、法號文徳院殿前藝州刺史賢明宗仁大居士。

利雅南谷と號し、當時の諸學者と交はり、又諸家の詩集にその名の散見すること、石梁文集卷之二に、詩題「丁丑(文化十四年)正月九日始雪」の次に「始雪訪瀧川公」、同後篇卷之一に「余將西歸三月七日山村公瀧河公及都下諸友辱臨敝舍喜賦」があり、蘇門山村伊勢守良由の清音樓集には南谷の序を冠し、卷之二に「送南谷君之官甲州」、卷之四に南谷の玉芝園詩集の序がある等その一例である。南谷は甲府勤番支配の時甲斐國誌の編輯に著手し、これは後任松平伊勢守定能の時に成功した。又致仕後文政四年水戸に遊び、舊友と會して東海唱和一冊を刊した。後に高標の如き書誌學者の出でたのも、親族に斯様な文學の才ある人の居つた影響であらうと思はれる。

### 三、高標の履歴

高丘の長子高標は幼字を彦三郎といひ、諱は初め高代、次に高猷、最後に高標と改めた。寶曆五年に生れ、同十年八月九日六歳にて家督を相續し、安永元年十二月十八日從五位下和泉守に叙任し、明和八年七月二十八日初て領地に赴くの暇を賜ひ、寛政元年四月十一日京都所司代松平和泉守乘寛が老中となつたので、十二日避けて伊勢守と改め、享和元年八月六日卒す、年四十七、芝高輪東禪寺に葬り、法號を寛龍院殿仁嚴玄機大居士といふ。子美濃守高聽封を襲いた。

高標字は培松、霞山と號し、崇文敬儒の念篤く、安永六年十一月藩地に一大學舎を新築して四教堂と稱し、矢野默齋、山本七兵衛を擧げて教

育に從はしめ、二人の年を経ずして死するや、筑後久留米藩士松下筑陰を聘し、十人扶持を給して儒官とした。

### 四、高標の藏書と鑑識

高標また蒐書の癖深く、經史子集醫卜織維は勿論、道典佛乘より蘭書に至るまで悉く收藏し、珍本奇籍ありと聞けば、千里を遠しとせずして之を懇望し、手に入らぬ場合には必ず之を謄寫して佐伯文庫に藏した。長崎には家臣の讀書癖あるものを書物奉行として出張せしめ、入津の唐船が船載せし書籍は必ず奉行に取調べさせて購入し、その爲藩の財政一時不如意となつたさうである。その收藏圖書八萬卷、およそ天下の奇秘所有せざるなしといふ評判であつた。

高標は徒らに書を蒐むるのみでなく、その鑒識の精細であつた事は西島元齡の慎夏漫筆卷一に

佐伯侯好文、藏書八萬本、天下奇秘、無所不有、文政丙戌年、其孫侯獻書千七百四十三部二萬七百五十六本、藏諸昌平楓山兩秘庫云、世之集書矜多闢富者、錦籤玉軸、盈行于架上、而不供蠹食鼠啖者殆希矣、侯則不然、覃精潛心、食而讀、梳而誦、二六時中、手不釋卷以故博識洽聞、一時無前、嘗聞一書估抱七條類稿來、左右以告、侯曰、類稿有大小二版、大邪小邪、對曰大本、公乃命購之、因謂其人曰、今行巾箱本、係於災後再刻者、大本是原板、事具巾箱本序中、人伏其精鑿。

とあるので知る事が出来る。又蒐書のために家臣に與へた手書の斷片が寫し傳へられてゐる。

淮南子 藏本に引合せ候處朱評同様に候間不用に付見せ本並便に返し候間天市へ其段申聞相渡可申候尤書物出で候度に見せ本取寄せ相送可申候後漢書 右者日本古代の板にて候哉又者唐本にて候哉相糺可申唐本にて候は、見せ本一冊差送可申候勸善書 右者唐本にて候哉又者寫本にて候哉寫本にて候は、用事無之候唐本にて候は、藏書

如きもこの獻書目錄を手寫した後に

右豐後佐伯侯の藏書、文政十亥の歲諸を江府に獻す、府馬鞍一具を賜ひ以て之に報ふ、侯の臣中島増太(米華)予に示すにこの書目を以てし、その事を語り意甚だ之を惜むに似たり、余曰く、侯家豈累世讀書を好むの人を産するを保せんや、それ或は好まざらんか、必ず蠹蝕散亂の患あり、今官庫に藏し、即ち鑒識の職具り、檢目借覽亦なほ外府の如し、乃ち侯の獻じて藏せざるは深く之を藏する所以にあらずや、余の如きは既に借覽に由なし、手づから書目を寫し、展玩自ら娛しむのみ、餽客食を視、次冊して涎を流すが如し(原漢文)

と書いてある。この獻書は今宮内省圖書寮、内閣文庫に尙藏せられ、中にも宋版道藏經の如きは、本邦唯一本のみの貴重書である。

大郷信齋の道聽途説第六編に、「佐伯の獻書」と題して書いてある中佐伯から江戸まで運搬の様だけ参考のため抄出する。

最初は二豐(豊後)より下の關を踰て山陽道八箇國を上り大坂へ着しそれより東海道と定め大凡長持五十棹人足五百人と觸れられけるが道線の嶮阻人馬の差支多しとて道中奉行にも再三評議ありて痛く荷物のかさを減省し且佐伯城下の浦より大坂迄關船にて運送し大坂入津の上彼地屋舖に於て長持十棹本馬二十駄に仕立東海道を護送し十月に及で著府昌平坂學問所へ向てこれを納めらるべしと聞ゆ獻書の盛事古今未曾有と稱すべし

又同書第二十二編(文政十一)に「道藏經の數」と題し

舊臘毛利家献上書籍の内種々の奇書は申に不及武英殿聚珍本數千卷の外道藏經の部數夥し此早春へかけて昌平書院に於て其改訂(勿ならず部數千七百四十三部卷數四萬六百二十四卷本數二萬七百二十八本)と聞ゆ天下無比の大部といふべしとある。

に申付候間全部八日便を以て平野茂助梅田傳八郎方迄差越可申候前書に後漢書唐本ならば見せ本一冊可差越候様認め候へ共通例之唐本にて只美麗なると申斗の事に候は、見せ本にても不及送候  
白鳳館四書小題 右見せ本一冊並便にて差越可申其上にていづれ共可申付候  
朝鮮本何品に不寄見當次第可申越書林共にも右之趣可申付候梶川七郎兵衛には申付候に不及候  
石摺類珍敷ものは申越可申候有ふれの品者夫に不及候  
宮本七藏梅田傳八郎方へ差越可申候麻姑山皇輿圖考右同人所持之由何れ一覽いたし度候  
賡離蘇州名勝圖詠天經或問右三種不用の書にて候間森源兵衛へ差送可申候

### 五、毛利氏の獻書

文政十年、高標の孫出雲守高翰の時、藏書の内一千七百四十三部一萬七百五十六本を幕府に獻じた。當時の獻書目錄が寫し傳へられてゐるから、詳細はそれに譲つて置くが、經史子集一千六百五十三部一萬百一十一本、醫書九十部六百四十五本、悉く唐本であつて、その中に宋版十八部元版四十五部を含んでゐる。幕府はこれを紅葉山文庫、昌平坂學問所の兩所に納め、翌年二月賞するに時服と鞍鐙とを以てした。文恭院殿御實紀文政十一年二月二十七日の條に

毛利出雲守その祖父伊勢守が拾ひ聚めし書籍どもたてまつりしかば時服に鞍鐙を賜ふ

とあり「拾ひ聚めし」とは妙な書き方をしたものである。この時の賜物は時服十襲と梨子地の鞍鐙であつたさうである。いづれ葵紋の附けられた品で、幕府時代葵紋の附いた品を賜はるは名譽であるが、藩の財政が不如意となる程苦心して蒐集した稀世の書籍を獻じた報酬としては、學者達には頗る不權衡だとの感を免かれなかつたと見える。篠崎小竹の



### 六、文庫の遺書と藏書印

明治維新後文庫の一部は大分縣廳に入り、今は同市福澤記念圖書館に保管せられ、重要なものは東京毛利子爵邸に移され、又佐伯町魚市場なる毛利家倉庫内にも残存するといふ。世上に散佚したのもあつて、京都府立圖書館でもわたくしの在職中書肆若林春和堂から佐伯文庫の大印を捺した隷釋寫本十六卷を購入した。

高標の藏書印は二種あつて、「佐伯文庫」の印は一般の圖書に押捺されたが、數冊あるものでも必ず卷首の一冊に限つてゐる。奇珍の書には「佐伯侯毛利高標字培松藏書畫之印」と三行に刻した篆字印を押捺した。

### 七、高標の著述

高標の著述は若干あつたが火災で焼失したと聞いたのみで、その書名を知らなかつたが、福井氏の近著「諸大名の學術と文藝の研究」第十諸侯と科學の十四に、佐伯侯毛利高標と雅衍と題し、雅衍二十二卷の存することを書いて居られる。解題として同書の記事を抄出する。

雅衍は未定稿の書にて序跋もなく編述の年代も明かならず稿本を裔孫の代に筆寫せしめられしものにて鳳凰を始め水禽族以下鳥類に關するもの十卷獸と蟲の部各一卷木屬竹屬合せて四卷花草六卷とすこの書は本草に關し各種の典籍より原文をさながら引き出でたるものにて別に斷案は下されどその該博なる智識と摺據の勞作いかばかりなりしかを知るべし

とある。同書には引用書及び諸侯の著述で所藏者を記してないのが多くそれ等は皆福井氏の藏書かも知れぬが、後人が研究の資料とする爲にも所藏者を明記して置かれたら宜かつたと思ふ。

### 八、毛利氏の刻書

東條琴臺の諸藩藏版書目筆記卷三に、佐伯藩爾雅樓として

正甲版論語集解

十卷二本

眞本墨子全書

四溟詩話

讀書敏求記

閑藏知津

法華經通義

五種算經

壺邱詩稿

壺邱詩二稿

壺邱詩三稿

十五卷八本 以上二種活字版

四卷二本明謝榛撰

四卷四本清錢曾撰

三十卷十五本明宗密撰

十六卷八本同上

十二卷卷六本清鮑廷博校本

七卷四本

九卷六本

十二卷七本 以上三種藤裝撰

の十部を掲げ、讀書敏求記は文化丙寅の大火に焼失し、高標の自編清風といふ詩集二十卷割剛半分成つたのが、これも版木焼失して事罷んだと記してある。文化丙寅は三年三月四日晝九ツ時芝車坂から出で、翌五日晝四時迄燃續いた大火をいひ、この時毛利家の愛宕下佐久間小路の上邸も焼失したので、前節著述の焼けたのも同時のことである。

わたくしは藏版書目の内閑藏知津だけを寫目したから、その序跋を寫してこの稿を終ることとする。

閑藏知津は明の釋智旭の輯餘する處、四十四卷總目四卷を二十冊に裝成してある。本邦では安永九年から着手して天明二年初て刊行されたので、高標の前名高猷が資を捐て、雕刻せしめたのである。輪王寺宮公遵法親王の序に

（上略）歲庚子、朝數大夫毛利高猷、捐費初命梨棗、刻成、請余序其首、

高猷華腹之胃、而絕無驕逸之習、棲神藝苑、傾心佛乘、誠衣冠中芬

陀利矣哉、余嘉其志、不敢以老慵爲辭焉、嗚呼一讀此書、即讀大藏

也、乃刻此書亦刻大藏也、其功德豈可涯哉（下略）

天明二年龍集壬寅春三月

准三后一品公遵親王謹撰辨書

（三二五頁下段へ續く）







圖書館歷訪 (其四)

早稻田大學圖書館

(64)

孰れもの學校圖書館の濫觴がさうであるやうに、我が早稻田大學圖書館の曙もまた自然發生的なものであつたらしい。つまり、我學園の前身、東京專門學校の創立を見たのは明治十五年十月のことであるが、學校の開設と同時に、兎に角、圖書室と名づけられるものが設けられたことに淵源するからである。しかし、これは概観してゐあつて、更に深く内面的に省察する時に當に由つて來ること古く、然るべき理由を發見する。

學園の創意者大隈侯の建學理想「學問の獨立」が學風の全基調をなしてゐたからであることは云ふを俟たない。がこれに共鳴した事實上の參畫者、小野梓は夙に讀書を中心とする自學自習の典據たるべき機關、共存文庫を建設したのは既に明治十二年九月に溯り、當時の「共存雜誌」は明確に此文庫の定則を今日に傳へてゐるのである。勿論、共存文庫と東京

專門學校圖書室、彼と我圖書室との相互の直接的な連繫が必ずしもあつたといふのではなく、假令あつたとしても今遽に詳になしうる所ではないが、彼が傾注しつゝあつた學園の建設に、この經驗と理想は何等かの形によつて顯現されない筈はなかつたであらう。この事は西村博士も「小野梓傳」の中に言及されてゐることであるが、尠くとも、其處にはある精神的な繋がりであつたに違ひないことは云へると思ふ。其と恰度必要が主動的な力となつて其他の創建者達の異常な努力との、實に渾然たる結晶が胎生期の我が圖書館だつたのである。此圖書室が偶然的發生的でなかつたといふことはこの成長を守立つ非常な努力が拂はれた事によつても説明出来る。

學校創立一年後にして早くも結成を見た新潟縣出身者からなる越佐會は、圖書室とは別に會員各自齎金して圖書の購入、共同閱覽を開始した(越佐會沿革略。同會廿五年記念演說集)といふことであるが、續いてこの計畫に倣つて同十一年一月、學生、校友有志によつて同致會(元・以文會)といふものが組織された。この會は會員相互の知識交換、學術攻究を目的とするものであつたが、その主要事業は専ら圖書の蒐集、閱覽に注ぎ、之等一切を擧げて學校圖書室に委託し、これが實に明治三十四年大學昇格直後完全に圖書室と合同するまで繼續されたので

あつて、勿論主體としての圖書室自身も独自の成育を遂げつたあつたといへ、その初期に於ける傍系のこの圖書に對する物心兩面の不斷の助力は圖書室をして漸次今日の大をなさしむる上に缺くべからざる要素だつた(中央學術雜誌第二五號同致會雜誌第一・二號)

斯くて、同三十四年十月早稻田大學となるや圖書室も又早稻田大學圖書室と改稱、木造閱覽室と煉瓦建書庫新に成り、市島謙吉氏を初代館長として漸く附屬圖書室の型態を備ふるに至つた。然しこれも臆て學園の膨脹につれて圖書室の今一段の充實は實に焦眉の急として大いに叫ばれ(早稻田學報、第二四九號)愈々御大典記念の中心事業として基金も集り、直ちに新装を見るべかりし大圖書室は種々の事情により遷延しつゝも、遂に總工費四十九萬圓を以て大正三十四年四月起工、翌年十月耐震耐火の新様式をもつて劃期的な飛躍を見たのである。

更にこの功成る其十二月には時の市島名譽理事は、本館に演劇圖書館を附設すべきことを提唱した。(早稻田學報、第三七〇號)これは昭和三年十月、坪内博士古稀記念として、別に早稻田演劇博物館の實現を見るに至り、本館の分身とし姉妹館として相携へて研究參考機關としての機能を果すことゝなつた。これら經來る足跡を振り返つて、その昔、僅か八疊敷の圖書

室より一貫して我學園は恒に圖書第一主義であり、教授學生當事者とを問はず打つて一丸となり學校即心の故郷として、兎に角、今日の圖書館に迄推進せしめた先人の烈々たる愛校心には後進の我々の考へさせられるものが多い。

古鈔本、禮記子本疏義

本卷子本は梁の國子助教、皇侃の高足たる陳の鄭灼の自著自筆に係る。即ち、鄭灼の義疏する禮記百卷の殘簡「喪服小記子本疏義第五十九」目であつて、漢籍國字解全書、禮記上所載、桂湖村翁の本書の解説を借りれば、

「卷首蠹蝕して明かならず、卷尾に喪服小記子本疏義第五十九といふ小名あり、經文と注文とを連載して惟一字の空闕を以て之を別ちたるのみ、極めて見難し、書中には王肅、劉知蔡謨、庾蔚之、賀瑒、崔靈恩等の諸說を引き、後に灼案、灼謂、灼又疑などの語を以て解説せり」

とあり。雪堂羅振玉また本書を影鈔し、「六朝寫本禮記子本疏義」として其の跋文にこれを裏書してゐる。本書はもと法隆寺の舊藏で、卷尾の上頭に「内家私印」の

(65)







圖書館歷訪 (其四)

早稻田大學圖書館

孰れもの學校圖書館の濫觴がさうであるやうに、我が早稲田大學圖書館の曙もまた自然發生的なものであつたらしい。つまり、我學園の前身、東京專門學校の創立を見たのは明治十五年十月のことであるが、學校の開設と同時に、兎に角、圖書室と名づけられるものが設けられたことに淵源するからである。しかし、これは概観してとあつて、更に深く内面的に省察する時に當に由つて來ること古く、然るべき理由を發見する。

學園の創意者大隈侯の建學理想「學問の獨立」が學風の基本調をなしてゐたからであることは云ふを俟たない。がこれに共鳴した事實上の參畫者、小野梓は夙に讀書を中心とする自學自習の典據たるべき機關、共存文庫を建設したのは既に明治十二年九月に溯り、當時の「共存雜誌」は明確に此文庫の定則を今日に傳へてゐるのである。勿論、共存文庫と東京

專門學校圖書室、彼と我圖書室との相互の直接的な連繫が必ずしもあつたといふのではなく、假令あつたとしても今遽に詳になしうる所ではないが、彼が傾注しつゝあつた學園の建設に、この經驗と理想は何等かの形によつて顯現されない筈はなかつたであらう。この事は西村博士も「小野梓傳」の中に言及されてゐることであるが、尠くとも、其處にはある精神的な繋がりであつたに違ひないことは云へると思ふ。其と恰度必要が主動的な力となつて其他の創建者達の異常な努力との、實に渾然たる結晶が胎生期の我が圖書館たつたのである。此圖書室が偶然的な發生的でなかつたといふことはこの成長を守立つ非常な努力が拂はれた事によつても説明出来る。學校創立一年後にして早くも結成を見た新潟縣出身者からなる越佐會は、圖書室とは別に會員各自齎金して圖書の購入、共同閱覽を開始した(越佐會沿革略。同會)といふことであるが、續いてこの計畫に倣つて同十一年一月、學生、校友有志によつて同政會(元・以文會)といふものが組織された。この會は會員相互の知識交換、學術攻究を目的とするものであつたが、その主要事業は専ら圖書の蒐集、閱覽に注ぎ、之等一切を擧げて學校圖書室に委託し、これが實に明治三十四年大學昇格直後完全に圖書室と合同するまで繼續されたので

と對校するに、書體文字語句共に相違多く、叢書本原本の轉寫模本なること一目瞭然たるものがある。(雪堂影印跋)尚、本卷の紙背に背記あり、金剛界私記一卷を書寫し、其何人の手に成るかを明かにしないが、卷末の識語に「治安元年八月廿八日以石泉御本寫之畢」とあり、更に其下部に「康平六年七月、於平等院、奉受此訖佛子快算」と跋あり、自づとその傳承も推定され、本寫經としては必ずしも最古とは云ひ難いが、しかも、これのみにしても王朝最盛期の紫雲の餘香飄蕩たるものを感じるのである。昭和六年十二月前書と共に國寶指定。丙辰、雪堂影印。東方文化叢書複製。

- 天延古文書
- これは田中光顯伯蒐集の天平より延喜年間に至る古文書にして、總て十五通、此處にその目錄のみを擧げる。
- 大宅朝臣賀是萬呂奴婢見來帳
- 天平勝寶二年九月五日
- 相模國司牒造東大寺司
- 天平勝寶七歲五月七日(相模國印二)
- 相模國司牒造東大寺司 請調邪價錢事
- 天平勝寶七歲十一月十三日(有相模國印)
- 東西市庄解 申勘定庄地事

- 天平勝寶八歲正月十二日
- 相模國朝集使解 申賣買地事
- 天平勝寶八歲二月六日
- 越中國司牒 東大寺三綱務所
- 天平神護三年四月二日(有越中國印)
- 普光寺牒 東大寺三綱務所
- 神護景雲四年五月八日
- 謹牒上 國師務所
- 寶龜三年八月十一日
- 出雲國司牒上 東大寺三綱務所
- 寶龜三年九月廿三日
- 添上郡司解 申賣買家立立券文事
- 延曆七年十二月廿三日(有大和國印二十九箇、裏面印文不明ノ印三箇)
- 三綱牒 造寺務所 請東市庄券參枚
- 延曆十五年八月二日(有東大寺印)
- 太政官牒 東大寺三綱
- 大同二年五月廿二日(有太政官印)
- 相替家立券文事
- 弘仁七年十一月廿一日(有大和國印二箇及)







書物伝望十一月期

圖書館歷訪

(其四)

早稻田大學圖書館

孰れもの學校圖書館の濫觴がさうであるやうに、我が早稻田大學圖書館の曙もまた自然發生的なものであつたらしい。つまり、我學園の前身、東京專門學校の創立を見たのは明治十五年十月のことであるが、學校の開設と同時に、兎に角、圖書室と名づけられるものが設けられたことに淵源するからである。しかし、これは概観してとあつて、更に深く内面的に省察する時に當に由つて來ること古く、然るべき理由を發見する。

學園の創意者大隈侯の建學理想「學問の獨立」が學風の全基調をなしてゐたからであることは云ふを俟たない。がこれに共鳴した事實上の參畫者、小野梓は夙に讀書を中心とする自學自習の典據たるべき機關、共存文庫を建設したのは既に明治十二年九月に溯り、當時の「共存雜誌」は明確に此文庫の定則を今日に傳へてゐるのである。勿論、共存文庫と東京

專門學校圖書室、彼と我圖書室との相互の直接的な連繫が必ずしもあつたといふのではなく、假令あつたとしても今遽に詳になしうる所ではないが、彼が傾注しつゝあつた學園の建設に、この經驗と理想は何等かの形によつて顯現されない筈はなかつたであらう。この事は西村博士も「小野梓傳」の中に言及されてゐることであるが、尠くとも、其處にはある精神

的な繋がりであつたに違ひないことは云へると思ふ。其と恰度必要が主動的な力となつて其他の創建者達の異常な努力との、實に渾然たる結晶が胎生期の我が圖書館だつたのである。此圖書室が偶然的發生的でなかつたといふことはこの成長を守立つ非常な努力が拂はれた事によつても説明出来る。學校創立一年後にして早くも結成を見た新潟縣出身者からなる越佐會は、圖書室とは別に會員各自贖金して圖書の購入、共同閱覽を開始した(越佐會沿革略。同會)といふことであるが、續いてこの計畫に倣つて同十一年一月、學生、校友有志によつて同放會(元・以文會)といふものが組織された。

この會は會員相互の知識交換、學術攻究を目的とするものであつたが、その主要事業は専ら圖書の蒐集、閱覽に注ぎ、之等一切を擧げて學校圖書室に委託し、これが實に明治三十四年大學昇格直後完全に圖書室と合同するまで繼續されたので

下帙中

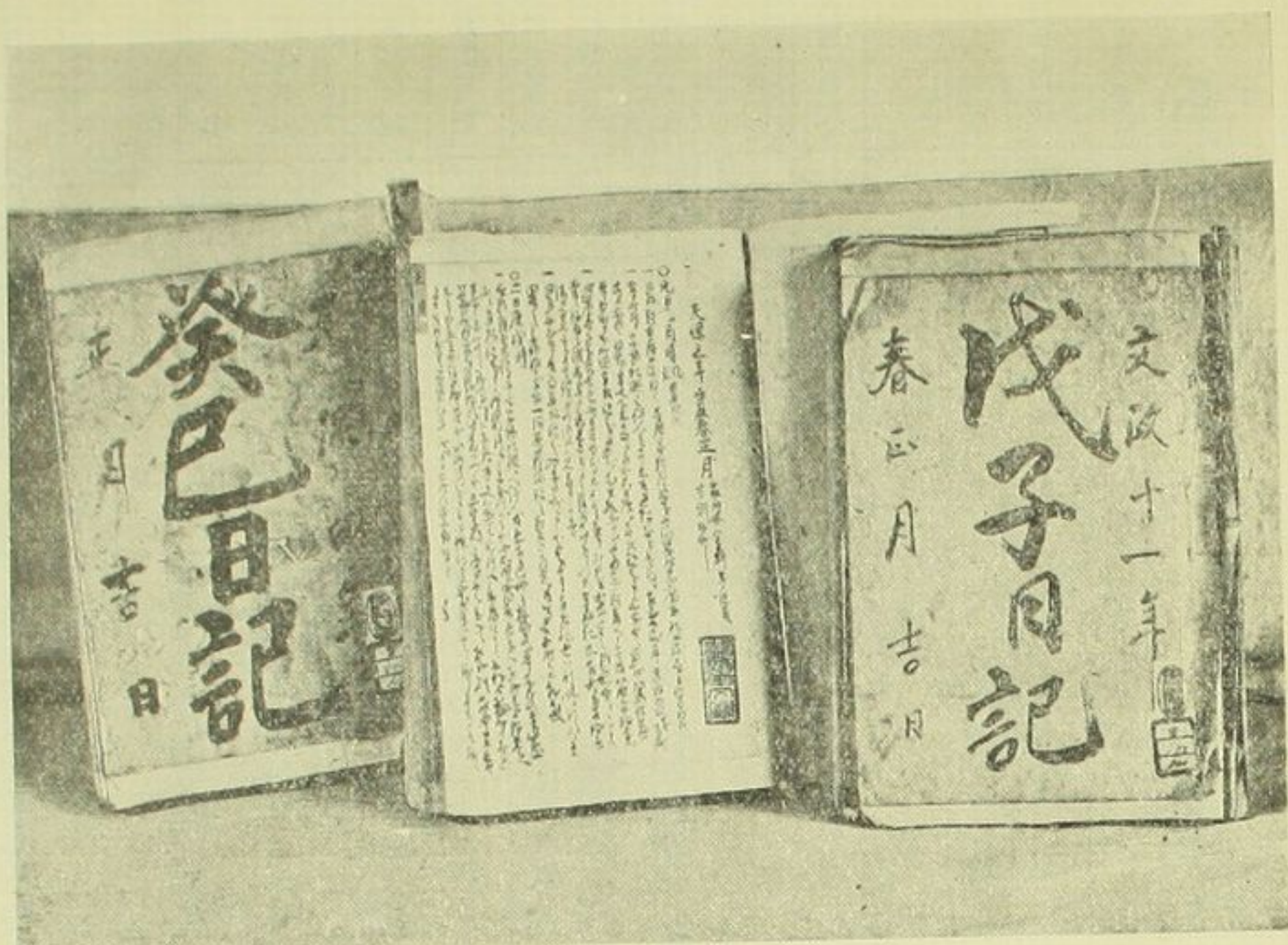
第九輯 八冊 (卷廿七、廿八、廿九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四上) 下帙ノ下ノ下ノ

第九輯 六冊 (卷三十四下、三十五上、三十五下、四十一、四十二上、四十二下) 下帙之下下編上

第九輯 八冊 (卷四十三、四(合本)、四十六、四十七上、四十七下、四十八、五十、五十一、五十三上)

以上で、本稿のいかに珍稀とするかの所以は説き出せば縷縷としてつきないけれども、これらに關しては既に箕村、曼羽、魯庵、春城の諸翁が隨所に解説されてゐる所であるから、重ねて冗筆を加へない事にするが、實にこの兩輯こそ馬琴眼疾もすでに膏盲に入りあの剛腹な馬琴をして「ながらふるかひこそなけれ見えすなりし書卷川に猶わたる世は」(回外剩筆)と嘆ぜしめ、有明無明の界を彷徨しつゝも終には娘琴童を督して(寫眞參照)さしもの大篇を完結したといふ、眞に文豪馬琴の非凡さを語るにふさはしい凄愴なほど悲壯な鏤刻碎身の部分であることだけは附け加えて置きたい。第八輯卷之一のみ稀書複製會刊行。

次は彼の日乗であるが、本館所藏本としては戊子日記、壬



















漢口武昌漢陽附近

# 列強の驚嘆宜なり 武漢戦の特異性

## あらゆる困難を突破

### 我が作戦統帥の妙

此の廣大なる地域に於て作戦する部隊が恰も有機體の如く一體となり緊密且つ積極的協力をした點に於て遺憾なく我が作戦統帥の妙を發揮してあるものである。殊に上陸作戦の如きは天衣無縫に實現したる成果を挙げ、之を以て隨喜せしめるに足るものである。例へば大別山一帯において絕對優勢の敵部隊に向ひ終始攻勢に出で大別山北麓に沿ひ一舉三百キロの大躍進を斷行した、敵は之に驚き逐次大別山方面に兵力を増援したが、江北部隊は前面の敵兵力の移動を察知するや敢然として正面を突破し一舉水、陸、空、黄砂を突破し漢口一番乗りを遂行した。又江南北麓においては徳安方面を攻撃して敵軍精銳の主力を牽制し留しこの間敵の側背に進出して

### その勇猛世界第一

江北作戦部隊の勇戦は鬼神も之を避くるの概があり寧ろ奇蹟とも云ふべきで疾風迅雷、内外馳したる裡に漢口一番乗りを敢行し、然るに敵が目にして勇猛世界第一と嘆賞したるに至るまであり内外確實の的たるに足るものだった。

### 後方部隊の殊勲

大別山北麓部隊の機動と補給は正に嘆賞に値するものであつた。同部隊は三百キロの大躍進を敢行し京漢線を遮断し漢口包圍の體勢の第一歩を踏出した。此の大機動の際には又それを可能ならしめた後方部隊の辛苦と偉勳を

### 江南部隊戦術の妙

江南部隊の作戦難を極めたものはない。それは峻険なる山地に據る無限の山地戦であつた。しかも敵は中央軍の精銳三十個師に餘る絕對優勢の兵力を以て之に據つたのであるが我軍は此

### 遊航作戦と精神力

江上遊航作戦が如何に難澁を極めたかに就いては既に周知の通りである。右の外武漢攻略といふ明確な作戦目標を持つてあつたといふこと、即ち容共抗日の根柢を覆滅すべく漢口へ漢口へと進軍した各部隊の精神もこの至難なる作戦を遂行せしめるに與つて力があつたこと勿論である。

端末を離れてからの作戦距離はおよそ五十キロを以て限度としてゐるが、今回の作戦は實にこの十倍の作戦距離に當るものであつた。而も作戦を起してより僅か數旬にしてこれを突破し赫々たる戦果を収めた如きことは前古未嘗のことである。

**體勢不利より發起**  
今回の作戦は長江の下流附近にある兵團を以て大山脈長江に區分せられた長遠なる地區を敵と戦ひつゝ前進、包圍體勢を形作らねばならなかつたので之が實に極めて至難なものであつたが、最後に於ては立派な二面包圍の體勢を形作り敵の第一首領を占領したのである。

**廣汎極まる錯雜地**  
作戦地が廣大であり作戦距離が長遠であつたためにこの間行はれた作戦には平原戦あり大山脈戦あり、遊航戦あり、廣汎なる地域に亘る錯雜地の戦術があつた。従つてその作戦は極めて複雑多岐を極めるものであり、この點凡ゆる戰術戰略の範式を殘して後世に幾多有益且つ興味あ

### 稀有の長距離戦

今回の作戦はナポレオンのモスコイ遠征にも比すべき大遠征であり、従つて作戦發起に際しては危懼の念を抱く向もあつた。ナポレオンのモスコイ遠征を顧みると彼の作戦發起點であるワイルノイからモスコイ迄の距離は今次作戦の發起點である長江下流及び淮河から漢口に至る距離と相匹敵してゐる。更に是を現代の大戦の起地から漢口まで直接距離約六百五十キロ、鐵道の端末を離れてからの距離も五百キロに及んでゐる。歐洲の近代戰術の思想を以てすれば鐵道の

北を等立るを國



# 漢口突入まで

## 五ヶ月に亘る戦果

漢口の突入は、五月五日に開始された。この突入は、漢口の防衛線を一掃し、漢口を占領するに至った。この突入は、漢口の防衛線を一掃し、漢口を占領するに至った。この突入は、漢口の防衛線を一掃し、漢口を占領するに至った。

- 五月六日** 及川支那方面隊司令長官、漢口防衛線を突破し、漢口を占領した。同日、漢口防衛線を突破し、漢口を占領した。
- 五月七日** 漢口防衛線を突破し、漢口を占領した。同日、漢口防衛線を突破し、漢口を占領した。
- 五月八日** 漢口防衛線を突破し、漢口を占領した。同日、漢口防衛線を突破し、漢口を占領した。
- 五月九日** 漢口防衛線を突破し、漢口を占領した。同日、漢口防衛線を突破し、漢口を占領した。
- 五月十日** 漢口防衛線を突破し、漢口を占領した。同日、漢口防衛線を突破し、漢口を占領した。

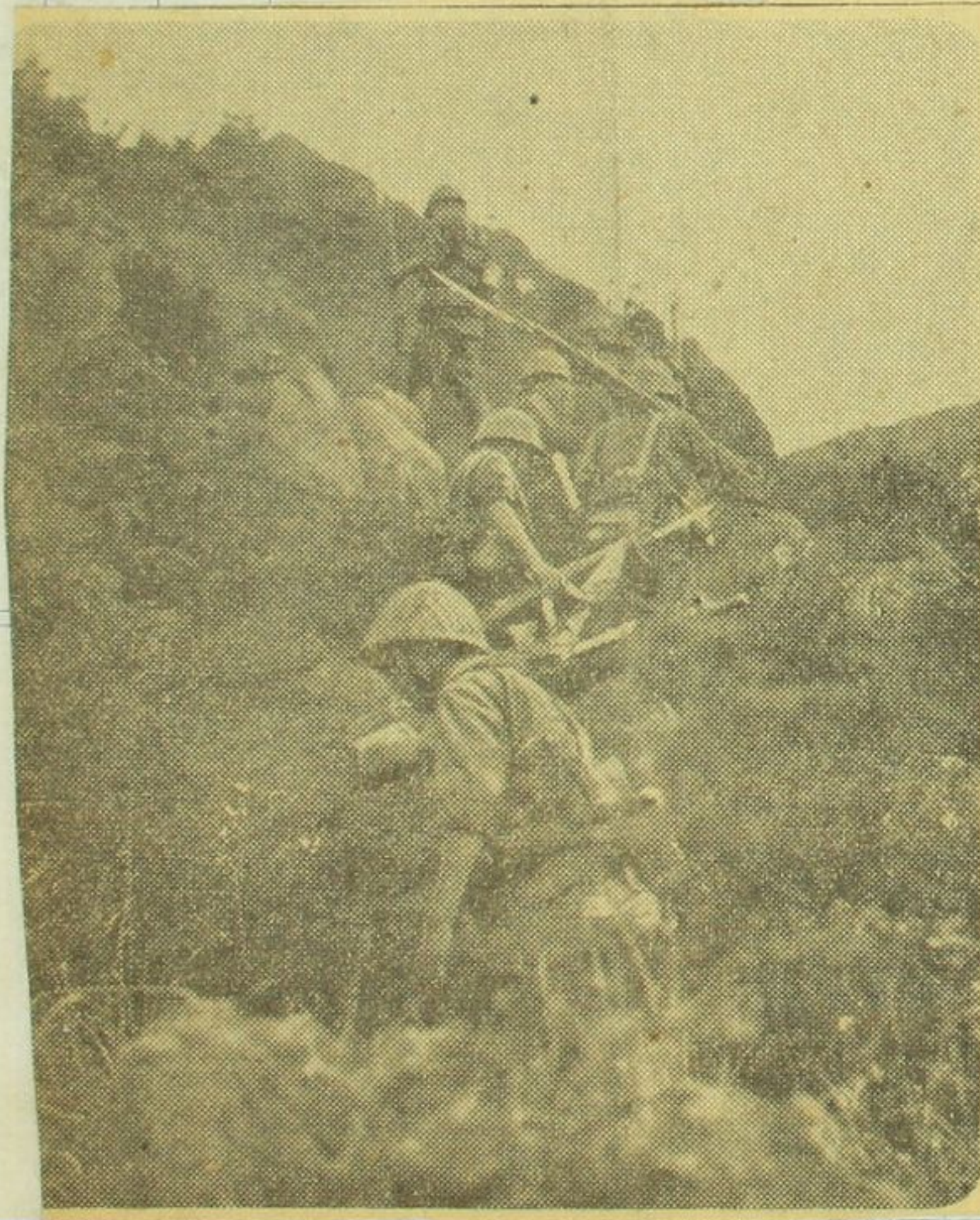
# よくぞ越え來し千山萬嶽

朝に一峰夕に一嶮・山靈も哭く苦戦の跡

## 漢口を指呼に勇士涙の感慨

【江南戦線最前線〇〇にて須藤特派員發】  
 山嶽といふ語、日本アルプスで、この支那漢口の言葉に、タリとした適合感がない、これも、幾つもの山があるだらうか？

山また山、縦にも横にも山が高し合つてわづかの空間―平野も―空の下はたゞ見る山の静寂だ、地が善々と肩を並べ押し合ひ―残すまいとしてゐるかのやうに―その山も巖然と雲表を衝く高山



漢口の戦線















# 陣出御の宮秩

## 焼ききつく南支海上に

## 畏し軍務御精勵

### 大本營陸軍參謀の御資格で



【軍艦〇〇にて二十二】  
日新井同盟特派員發  
秩父宮殿下におかれましては、  
も大本營陸軍參謀の御資格を以て  
親しくバイヤス海軍上陸作戦に  
御参加全軍將士の崇敬を集めさせ  
られてゐるが、十八日はあかも  
上陸成功の日より丁度一週間前  
神速急進海軍の旗を引くが如  
く殿下におかれましては、清石に御  
心をとせられしは、御開眼を  
割かせられて上陸軍備隊隊旗  
〇〇に御乗艦あらせられた、この  
浪の光り目を射るばかり午前十  
一時軍艦〇〇の内火艇は、漸くし

正午〇〇艦長の御先導にて前部  
艦を御遊覧直水兵に對しても御  
破顔一笑御答遊ばさる、やがて  
〇〇艦隊の奏樂響に甲板に  
御海軍陸軍部と御相見な陣中  
料理を召され御遊覧あらせられた  
殿下には

### 對岸七狼山の頂き

にある白壁の家の部落を認められ  
「艦長あれが有名な海賊の巢か」  
など、御元氣にくつろがせ給ひ午  
後三時半御機銃隊の外麗しく御退  
艦直ちに軍艦〇〇をも重ねて御見  
學の上午後三時半〇〇艦隊の飛行  
基地を御視察に向はせられた、折  
〇〇飛行隊は陸上陸軍の前方  
進掩護のため全勢力を直接協力部  
隊と編成隊送隊の二に分け機銃  
の雨を降らす一方、友軍の食糧投  
下にあつた、殿下には〇〇指揮官  
中であつた、殿下には〇〇指揮官  
の御案内にて急造の接橋から極め  
て御氣配に白砂の上に御上陸、南  
海の太陽目をいる許りの砂灘を御  
ひろひあらせられた、溜邊には白  
いなと御言葉あらせられた時が  
やつと九十度であつたと一戸御附

### 山から持つて来た

ばかりのバナナ、蘇餅などの補込  
みが、艦の艦を投げてゐる、殿下に  
は海軍の生活振りを殊の外御心  
に召させ給ふたやにて御朗らかに  
御記帳遊ばされつゝ油と汗にまみ  
れており立つたばかりの飛行士を  
御遊覧遊ばされ飛行機隊の状況を  
御取遊ばされた「そこへ行つた  
のか、さうすると廣東までは……  
一天一杯に擲げられた地圖の上  
に御指をあげさせられ御余念がな  
い、殿下には可なり奇古された舊  
式の御軍服を召され長靴、陣太刀  
の御姿に御立派に地圖を按せら  
れてゐる御様子はいさく一中佐參謀  
としか拜せられず並ぶもの皆感  
涙に咽んだ海に金枝玉葉の御身を  
以て巖に突如東京を御出発、軍艦  
〇〇に御乗艦、〇〇集結地におい  
て始めて上陸艦と御會同一路バイ  
ヤス海軍の御航海に上られたの  
であつた、軍艦〇〇における殿下  
の御日常は戦時とは申せなく

### 幕僚並みに

如きも御同僚と同じく三名である  
といふ御有様で、南海の太陽の射  
込むときは御居室は全く蒸風呂の  
如く殿下がふと「今日は少し涼し  
いな」と御言葉あらせられた時が  
やつと九十度であつたと一戸御附

## 再度の御出陣に 妃宮の御心遣ひ

【東京電話】戦果輝く廣東攻略戦に長くも歩兵中佐秩父宮  
殿下にも重き御軍務をになせられ本月初旬東京御發、こ  
の度の南支第一線に御出陣、諸々の御武勳をたてさせ給ふ  
たが、殿下にはこれより先五月三日から一ヶ月間に亘つて  
上海、南京方面の各戦線に御視察、徐州攻略戦には陸軍  
春仁王殿下と御下、御巡視更に北支戦及び滿洲各地を御視  
察大本營參謀の御資格にて重役御軍務を終へさせられたの  
であるが今度重役の御出陣に宮家では唯々恐懼申上げて  
ゐる青山町御殿では妃殿下が日夜殿下の御武運長久を  
御祈念あらせられて承るが妃殿下には最近御健康も  
全く御恢復至極御元氣にて寒さを控へ衛兵に賜はる靴下、  
手袋等を御賜遊ばしてをられるが今度の餘りにも早き皇  
軍廣東入城の報は二十一日夜のラヂオまた今朝の新聞で御  
電になり殊の外御喜びの由に承はる

### 適確なる御指圖を

御取り遊ばされたのであつた上陸  
成功の第一信號を御遊覧遊ばされる  
や殿下には眞ッ先に勝鬨を擧げさ  
せられた、かくて翌日の正午には  
〇〇艦内に來た第二線、第三線部  
隊揚陸隊中にして御舟着るが如  
き中をも御賑ひあらせられ早速  
軍艦〇〇の内火艇を驅つて上陸地  
點を御視察あらせられ前線の諸部  
隊に激戰の御言葉を賜つた、翌十  
四日殿下には下浦艦の部落到御上  
陸遊ばされた、この日こそ南支那  
の醜土が日出づる國の皇子の御下  
にひれ伏した幸ひの日であり、日  
支平和と兩國々交の平穩に還元す  
べき佳き日となつた(御寫眞は秩  
父宮殿下)

る遊覧







號外

# 聞新日京東

新行要聞新日京東 三ノ一ノ一町東有國野池市京東 所行委 基 局報 人行製刷印報

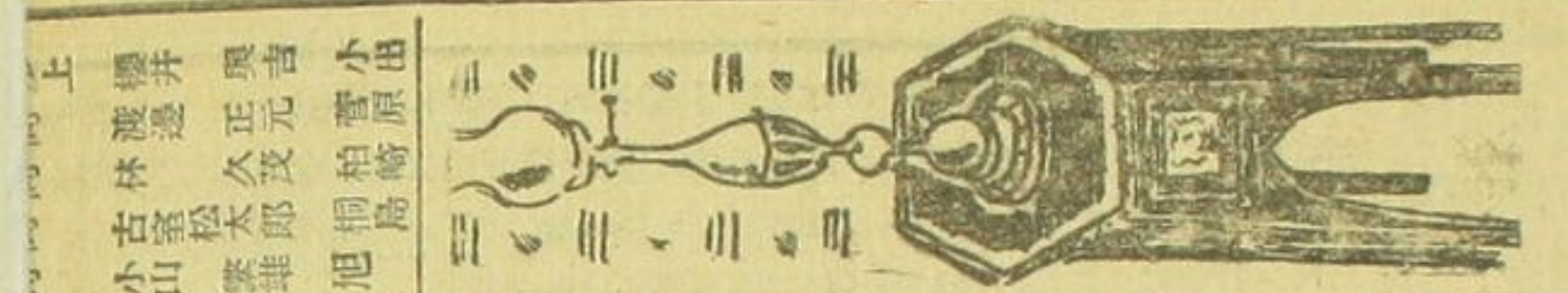
## 近代戦史上稀に見る 廣東突入作戦の偉業

【軍機〇〇にて二十二日發同 來た海軍航空部隊は陸軍部隊と密接なる共同の下に敵を襲は遂に敵が最後の區域と稱す廣東市に突入し今次大作戦の第一目的を見事完了して中外を驚愕せしめたが、この間において陸軍部隊の前進路を開放し又遠く奥地に進出して敵背後部隊の進路を切斷して

前進路開放のためのみに使用した出動延べ機數だけ見ても實に二千數百機に達し投下爆彈總數又五百餘機また敵に襲へた直接損害は六千、戦車五十餘、貨車、自動車その他二百餘を越えるものと見られ、陸軍部隊の前進をはげま

んとして敵が防禦線を築いた部隊、市街を完全に襲滅せるもの多數、解石政權が生命線となつたのんだ馬渡、廣九兩線は實に三十數ヶ所に切斷されては、實に堂々大編隊を以て上空から見守る海軍の雄姿に、密集した強力な誘導の下に、密集したのまゝ最後の敵陣地に突入したのであるが、かかる皇軍の陸海協力作戦が今度ほどうまく行はれ敵を潰滅せしめたのは有史以來未曾有のこととされてゐる

瀟に著手し、その目的は、海軍機の手の中にあり、また急進する皇軍の前に余漢謀、吳鐵城を初めとする廣東諸將領は廣東陥落を前にして早くも逃亡し海軍機の偵察に依れば市の西北方郊外にはこれ等逃亡諸將領の自動車約六十台が蜿蜒列をなして逃走しつつあり、わが海軍機はこれに對し痛烈な銃爆撃を加へた、なほ右翼北方に迂回したわが陸軍〇〇部隊は敗走する敵の退路を斷ちこれを殲滅するため且急進中である



### 資本家と俳優 (中) 渥見清太郎

選もからトン／＼旗子にゆくと、だつた。八十階に歸する今助の利、

「お、なんぞと主殿？」

それから先、今助は中村屋の主人になつて、毎晩行儀白いはらふと金を儲け、儲かると江戶一の成金とらたはれ、昨日まで法被の折柄は、今日は京橋五郎兵衛の御用となり、芝居で京橋様といへば短くも歌るといふ資本家になつてゐたのである。

その今助が、いま芝居へマウツと入つて来たのだ。

頭草二、おもむろに二階を昇り、渡すといふ頭草五郎が影を、面をしてゐる。今の六代目には、父にあたる三代目繁五郎である。「音羽屋、どうしたんだ、芝居をやらねえのか？」

「へ、どうも今度の役は氣に入らねえから、如草さんに直してもらはうと思つてゐます。」

頭には作事頭、音川如草が、張りつて、中村屋の利益は大したもの

「お、なんぞと主殿？」

それから先、今助は中村屋の主人になつて、毎晩行儀白いはらふと金を儲け、儲かると江戶一の成金とらたはれ、昨日まで法被の折柄は、今日は京橋五郎兵衛の御用となり、芝居で京橋様といへば短くも歌るといふ資本家になつてゐたのである。

その今助が、いま芝居へマウツと入つて来たのだ。

頭草二、おもむろに二階を昇り、渡すといふ頭草五郎が影を、面をしてゐる。今の六代目には、父にあたる三代目繁五郎である。「音羽屋、どうしたんだ、芝居をやらねえのか？」

「へ、どうも今度の役は氣に入らねえから、如草さんに直してもらはうと思つてゐます。」

頭には作事頭、音川如草が、張りつて、中村屋の利益は大したもの

### 米國の輿論

山 川 均 夫

米國に「羅斯福研究所」といふものが、

議院と同程度の資料のフロッグを蓄んでゐる。民主黨が若し之

現在ルーズベルトを支持してゐる野の民主黨の三五%が現在のルーズベルトの政策を少し左傾し過ぎてゐるとなし「中崩」の政策を望んでゐるといふことは注目すべきニュースと言へやう。



















ら手を下して殺したではないか。今日の  
ボルシェヴィストが家族を破壊し親子兄  
弟親戚朋友を惨殺して顧みず、宗教を否  
定し、傳統を蹂躪することはこれ全く彼  
得を眞似たものに外ならず。レーニンが  
時々彼得大帝を彼の政治上の祖先である  
と言つてゐたことを思ひ合すれば頗る興  
味のあることである云々と述べてゐるの  
である。

興に乗じてここまで書いて来て、僕に  
興へられた頁数が段々狭まつて来たこと  
に気が着いた。で、エリサベスからカテ  
リナ女帝、次にポール一世の暗殺、越つて  
歴山一世時代に至り貴族間に於ける革命  
精神の勃興や一八四五年頃からボルシェ  
ヴィスムの眞の開祖でレーニンの先驅者  
なるヘルゼンやバグニンに關する経緯  
が事や細かに説いてあるのであるが、今  
は姑く割愛して、著者パレオロフ氏が  
露國の文豪ドストエーフスキーを證人に  
立て、その言葉に據つて露國今日の情勢  
の必至を論定した極めて興味ある場面を  
窺ふことにする。

ない。特に露國  
人の心の奥の奥  
までを探検して  
その深底に潜む  
秘密を把握摘抉  
する技術に至つ  
てはツルゲネー  
フにせよ、トル  
ストイにせよ、ド氏に較ぶれば遠く及ば  
ざる處である。この視角から觀ればド氏  
は立派な豫言者であり、その著書は凡て  
皆、默示録であると言ふも決して過言で  
は無いと賞讃し、さてその「虐げられた  
人々」や「カマラゾフ兄弟」やその他  
の著書の中から一々その小説中の人物を  
拉し來つてそれ等の人々をして露國人の  
革命的精神状態を説かしめるのである。  
その例證の一斑を擧げて見れば「露國入  
は常に極端から極端に走らねば、氣がす  
まぬ生れつきである。これは露國人の持  
つて生れた性分で、所謂己むに己まれぬ  
ところのものである。だから露國人は常  
に分限と言ふものを無視して之を超越  
し、絶對境、不可知境、不可能境の範疇  
へ飛び込んで行くことを要求してゐる。  
露國魂は常に過激な經驗がして見たいと  
待構いてゐる。これは歐羅巴人の精神を  
以てしては到底思ひ及ぶところのもので

ない」云々、或は又「露國人は常に度外  
れたこと、法外なこと、途方もないこと  
が爲て見たくてたまらぬのである。例へ  
ば極めて危険な千仞の斷崖の上に立て、  
そしてその奥底をも見極めんとしてその  
下を窺いて見ないでは居られぬ氣持がす  
るので、屢々氣狂のやうにそこから下へ  
飛び込むのである。これが人をして目を  
聳たしむる露國人の特徴である」云々又  
は「何でも否定することが露國人の一種  
の性癖で一切合切を否定し、所謂破れか  
ぶれとなつて仕舞ふ。昨日までは善人で  
あつたものが、今日は全く一變して、手  
の指げられない悪黨となりするのであ  
る」云々、そして最後にはドストエーフ  
スキーの有名な文句「ニヒリストが露國  
に發生したわけは、露國人が皆ニヒリス  
トであるからだ」等々々、を擧げ來つて、  
「斯のやうに露國文豪は今日の露國のこ  
とを豫言して居るではないか」と宛然明



判官が法廷で判決を下すが如きの壯觀は  
實に立派なもので、讀み來て自然頭が下  
がるやうに思はれる。  
書を讀んで眼光紙背に徹するとか、又  
は行間の墨を讀破るとか言ふ文句は蓋  
しパレオロフ氏の如き讀書の態度を言  
ふたのであらう。氏の如き眼光を以て本  
を讀めば小説であらうと何であらうと、  
皆このやうに重要な引證の役に立つこ  
と、恰も牛渡馬勃敗鼓の皮、名醫は之を  
用ひて起死回生の術を施すに同じことだ  
と深く感じて、讀書法に關する反省を新  
にした。

文學博士  
本間久雄著  
明治文學史  
(上卷) 日本文學全集 二編  
(下卷) 日本文學全集 八編  
内容見本進呈

我列  
トクククククク  
トクククククク





海鏡閣

